

# 「つながり」から「結い」へ 各地でのコムケア活動が始まりました みんなで作るコムケア物語の5年目

コミュニティケア活動支援プログラム  
2005年度活動報告書



住友生命社会福祉事業団  
東レ株式会社  
コミュニティケア活動支援センター

コミュニティケア活動支援センターは住友生命社会福祉事業団および東レ株式会社より本プログラムの実行事務局を受託している組織です。

## みんなで作るコムケア物語

### コムケア仲間による各地での活動が始まりました。

コムケア活動も6年目に入ります。

最初はどこに向かうのか、いささかの不安もあったコムケア活動も、5回にわたる資金助成プログラムを通して、のべ800を超える団体からの応募をもとに、140団体への資金助成を実施。並行して、応募団体を中心にしたNPOへの活動支援やNPO相互のつながりづくりを推進してきました。

毎年の公開フォーラムや公開選考会には毎回100～250人の参加者があり、企業人や行政人、学生などの交流も実現。熊本から仙台まで、各地での交流会も開催してきました。こうした活動を通じて、この活動の趣旨に共感してくれる仲間も全国に増えてきています。

新しい物語も少しずつ育ちだしています。介護関係の大きな輪が「介護なんでも文化祭」を実現。ホスピタルアート活動も全国展開してきています。コムケアの仲間同士の交流も広がりだし、福岡や大阪など、各地での自主的なコムケアフォーラムも始まりました。

新しい「結い」(支え合いのコミュニティ)の構築に向かって、コムケア活動は少しずつ前進しています。

コムケア活動を開始した頃はまだ、応募団体も自分の活動で目一杯だったこともあり、ネットワーク志向もあまり感じられませんでした。最近の状況は全く違います。むしろ他の団体や活動とのネットワークを目指す人が増えてきています。

もちろんNPO同士の交流の場は少なくありませんが、NPOだけではなく、さまざまな立場の人が集まって、しかもみんなが同じ目線で気楽に話し合う場はまだ少ないようです。参加してくださった方から、こういう集まりは初めてだという声も少なくありません。そして、そういう人たちが、そういう会をまた自らが中心になって開催していってくれるのです。

「ひらく」から「つなぐ」へ、そして「つくる」へと進化してきたコムケア活動も、この5年間の活動を通して、分野を超えて、全国にコアネットワークが芽生えだしてきているのです。

最近では、資金助成プログラムや事務局主導の活動以上に、そうしたコムケア仲間たちの各地での活動がコムケア理念を広げていってくれているように思います。

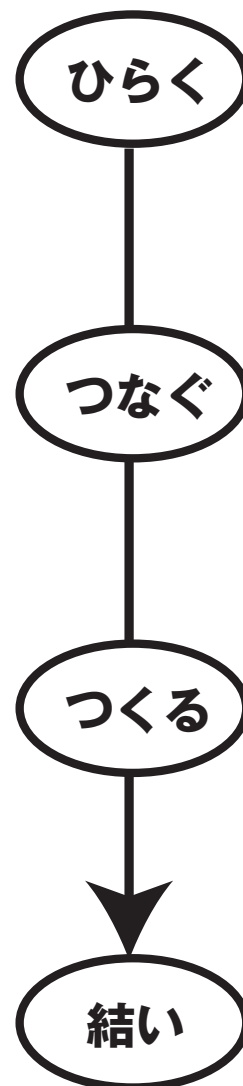
コムケア活動はいよいよ新しい段階に進みそうです。

本報告書は、こうしたコムケア活動の5年目の記録です。

活動に参加してくださったみなさんに感謝いたします。

\*「コムケア活動」は、私たちが取り組んでいる活動の総称です。

2006年5月15日  
コムケアセンター事務局長  
佐藤修



# 目次

## 第1部 プログラムの概要と活動報告

1. プログラムの概要	5
2. 資金助成プログラム	5
3. 活動支援プログラム	9
4. 交流支援プログラム	10
5. これからの展望	12

## 第2部 資金助成プロジェクト活動報告

1. 活動支援プロジェクト	14
2. 活動費一部支援プロジェクト	24
3. イベント支援	29

### 〔コラム〕

・ 3つのキーワード	4
・ このプログラムではこんなことを大切にしています	8
・ イベントはコムケア仲間のつながりを育てる	33

### 〔資料〕

1. 「つながりこわし」から「つながりづくり」の時代へ	34
2. 資金助成プログラム選考経過報告	36
3. 資金助成プログラム最終選考会での事務局長メッセージ要旨	39
4. 資金助成プログラム最終選考会の報告	42
5. 資金助成プログラム選考委員のコメント	46
6. 最終選考会寄付システムについて	51
7. 資金助成プログラム募集チラシ	52
8. 資金助成プログラム申請書様式	54

### このプログラムを通して実現したいこと

#### ○安心快適社会に向けての「大きな福祉」への関心の醸成

福祉というと、高齢者介護とか障害者支援などの直接的な問題解決に目が向きやすいが、将来的な問題も含めて、すべての人が安心して快適に暮らせる社会づくりを「大きな福祉」と捉え、そうした活動への支援を通して、社会における「大きな福祉」「安心快適社会の実現」への関心を高めていく。

#### ○さまざまな市民活動をつなげる共創型相互支援の輪づくり

実際に市民活動に取り組んでいると、忙しさの中でなかなか外部に目を向ける余裕がなくなり、タコツボにおちいりがちだが、効果的な活動をしていくためには、さまざまな市民活動が連携し支えあっていくことが必要である。テーマを超えて、さまざまな市民活動が学び合い、支え合う「共創型相互支援の輪」を広げていく。

## 3つのキーワード

### ◆大きな福祉

社会にあるさまざまな問題を、みんなが自分の問題として共有化し（つまり当事者になって）、みんなが知恵と汗を出しあいながら、みんなにとっての新しい価値（積極的な解決策）を創出していくこと。これが、私たちが考える大きな福祉です。福祉というと、介護や高齢者問題など、特別の問題をイメージしがちですが、私たちの生活や社会はさまざまなものが複雑に絡みあっています。ですから、個々の問題ごとに解決していくと同時に、それらをつなげていくことが必要です。

### ◆コミュニティケア

コミュニティケアという言葉は、一般的には、「さまざまなハンディをもつ人々を、隔離された施設ではなく、地域社会の中で、自立した生活が送れるように支援しようとする考え方」とされていますが、私たちはもっと広義に捉え、「お互いに気遣い合いながら、放っておけないことに対して、それぞれが出来る範囲で汗と知恵を出しあうこと」と考えています。

コミュニティとは「重荷を背負いあった人間のつながり」ですが、私たちは最近、重荷を背負いあう関係を捨ててきたように思います。しかし、重いので捨ててしまった重荷の中に、実はとても大事な宝物があったのかもしれませんが。そんな思いもあって、改めて重荷を共有する、人と人のつながりを大事にしていきたいと考えています。

### ◆共創型相互支援の輪

コムケア活動は、誰かが誰かをケアするという一方向的な活動ではありません。参加した人が、お互いに支援し支援される双方向的な関係を目指しています。ケアすることで実は自らがケアされていることに気づけば、活動は永続し広がっていくはずです。やや気負って言えば、この活動を通して、社会に、「ケアしあう文化」の風を吹きこみ、さまざまな活動を「大きな福祉」に向けてつないでいきたい。それによって、相互支援の輪をみんなで育てていきたいと考えています。共創とは、一緒に汗と知恵を出し合って、新しい価値を創りだしていくことです。

# 第1部 プログラムの概要と活動報告

## 1. プログラムの概要

このプログラムは、みんなが気持ちよく生活できる社会に向けて、さまざまな活動に取り組んでいる活動団体や個人を支援することを目的としています。

資金助成が中心に置かれていますが、単なる資金助成プログラムではなく、資金面以外も含めて、お互いに支援しあえる関係を育てていくことを目指した、活動の輪づくりプログラムと言っていいでしょう。

市民活動のネットワーキングの大切さは多くの人が指摘していますが、自らの課題を超えて、あるいは現実の忙しさを超えてつながっていくことは、口で言うほど簡単なことではありません。活動に取り組んでいる人たちは、当面の課題に追われがちで、ほかの問題に目を向ける余裕がなかなか持てないのが現実です。

しかし、社会の複雑さを考えれば、個別課題への対応だけでは限界があります。一見、関わりがないように見える問題が、深くつながっていることも少なくありません。個別課題を超えて活動をつなげていくことが、問題解決にとって重要になってきています。

このプログラムでは、みんなが気持ちよく生活できる社会（大きな福祉が実現している社会）に向けての活動はすべてコミュニティケア活動（コムケア活動）と考えています。

したがってなんでも対象になります。それではプログラムの性格が曖昧になるという意見もありますが、私たちは敢えて切り口をできるだけ広げたいと思っています。

### ■目的：支えあいの輪づくり

次の2つがこのプログラムの目的です。

- ①コミュニティケアの分野で活動している（あるいはこれから活動しようとしている）市民活動団体の、新しいプロジェクトを支援すること。
- ②そうしたことを通して、さまざまな活動のつながりをつくり、お互いに支援しあえる市民活動の輪を育てていくこと。

### ■支援形態：共創型相互支援の関係

資金助成だけではなく、応募された団体の活動に関して、可能な範囲で何でも相談に応じることにしています

が、それを可能にしていくために、応募団体にも自らの強みを活かして、他の団体の支援に参加していただく仕組みになっています。お互いに支援しあえる関係を育てていくために、応募したみなさんにも、自分たちの強みを公開してもらい、できる範囲で「支援する側」でも活動してもらうことを呼びかけています。

### ■具体的なプログラム：毎年、参加者の意見を踏まえて進化させていきます

#### (1) 資金助成プログラム

- ①新規プロジェクト支援（30万円と10万円の2種類）
- ②イベント支援（一律10万円）

#### (2) 活動支援プログラム

活動に関するすべての相談に可能な範囲で応じ、このプログラムに関わってくださったみなさんを巻き込みながら、問題解決に努力します。

#### (3) 交流支援プログラム

参加した人たちが交流し学びあえる場を、さまざまなかたちで創出していきます。

## 2. 資金助成プログラム

### (1) 新規プロジェクト支援

大きな福祉の実現に取り組んでいる団体やこれから取り組もうとしているグループの新しいプロジェクト起しを中心に、総額400万円の資金助成を行いました。

### ■募集活動

6月20日に募集要項を発表し、8月15日までの期間、次のメディアを通して募集を行いました。今年度は、「暮らしのなかの介護と医療」「暮らしのなかのつながりづくり」を重点テーマとして設定しました。

- ・募集案内チラシの配布
- ・各種のメーリングリスト
- ・コムケアセンターのホームページ
- ・コムケアサロンや地方交流会での呼びかけ
- ・新聞などでの告知案内

## ■応募に関する相談

応募段階から相談に応じました。相談内容は申請書の書き方などが中心でしたが、プロジェクト起こしそのものや団体の運営に関わるものもありました。電話やメールのほか、直接、事務所まで相談にくる団体もありました。

コムケア団体訪問や地方交流会などの際にも、その地域の団体からプロジェクトの相談を受けることもありました。資金助成とは関係なく、活動支援がはじまったものもあります。

## ■応募状況

応募件数は総数146件でした。これまで交流会などを実施していない、北海道や四国からの応募が少ないことで、現地での活動の重要性がわかります。

テーマ別には、大きな福祉を標榜していることもあり分類が難しいのですが、入り口を基準にして分類していますので、一つの目安と考えてください。今年度は「介護・医療」を重点テーマにした関係で、高齢者や地域福祉関係が多くなりました。

### <地域別分布>

北海道	4
東北	11
関東	65
中部	17
関西	28
中国四国	8
九州沖縄	13
合計	146

### <テーマ別分布>

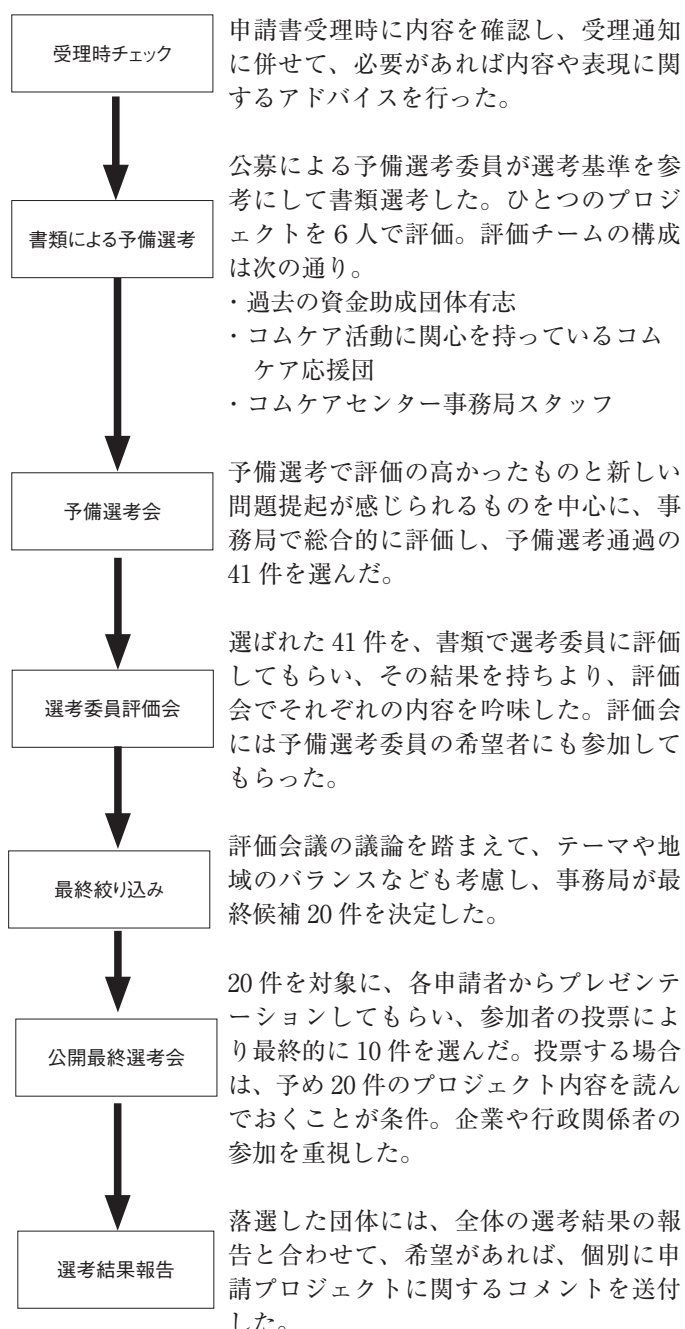
高齢者	33
地域福祉	22
障がい支援	21
子育て	20
芸術・文化	12
国際交流	6
ホームレス	5
女性	4
スポーツ	4
介護者支援	3
環境	2
その他	14
合計	146

## ■選考方法

選考の進め方はホームページで公開し、途中でも選考がどう進んでいるかわかるようにしました。これに関しては、資料2にホームページ掲載記事を再掲しましたので、ご参照ください。

選考に関しては、できるだけ多くの人に事前評価をしてもらい、そこで選ばれたものを選考委員が評価し、それを踏まえて事務局で20件の最終選考候補を決定しました。その20件を、応募者も参加できる公開選考会でそれぞれから発表してもらい、参加者の投票により支援先を決定しました。

大きな流れは次の通りです。



## ■選考基準

選考に当たっては、次の点を参考としてもらいましたが、最終的には「大きな福祉」の視点からプロジェクト全体の意義を考え、総合的に判断するようにしました。

- ①社会性：本プログラムで定義する「大きな福祉」の理念に沿っていること
- ②先進性：これまでなかったような新しい要素が含まれていること
- ③発展性：一過性のものではなく、継続的であり発展が期待されること
- ④汗のかき具合：お金で解決しようとしていないこと
- ⑤支援の必要性：支援することが実現の不可欠な要素であること

## ■選考委員

予備選考は実践的な立場にいる人と第三者的に活動に関わっている人とを組み合わせることに留意しました。昨年に引き続き、昨年度までの応募団体の有志が自発的に参加してくれたことも大きな特徴です。

選考委員は昨年同様、コムケア理念に共感してくれている専門家をお願いしましたが、選考委員には「選考」というよりも、予備選考で選ばれた個々のプロジェクトの内容に関して、それぞれの専門的な立場から評価してもらいました。

最終選考会には、応募団体も含めて、88人が自発的に投票に参加してくれました。

### <予備選考委員>

○NPO関係者 11人

麻野 信子：さわやか徳島

檜木八重子：ともに生きる

加藤木桜子：ゆうゆう

斉藤 ちず：コンカリーニョ

下山 浩一：コミュニティアートふなばし

須田 正子：よりあい\*ええげえし

橋本 克己：彩星学舎

星野 一人：子育て学ネットワーク

松清 智洋：名戸ヶ谷ビオトープを育てる会

宮田喜代志：明篤館

横尾 徹也：UDくまもと補助犬サポーター

○企業関係者 7人

菅野 弘達：インキュベーションハウス

北村 英男：ネクストマネジメントオフィス

佐藤 和美：(株) エスシーシー

新谷 大輔：(株) 三井物産戦略研究所

瀬谷 重信：(株) コラボレーション経営研究所

西川 義夫：(株) アイネック

渡邊 早苗：住友生命

○NPO支援者 4人

大川 新人：コミュニティビジネス研究センター

小山 美代：社会福祉士

佐藤 祐子：我孫子市サポートセンター

八木 雅昭：高知県ボランティア・NPOセンター

○コムケアセンター 4人

斎藤正俊、佐藤修、橋本典之、宮部浩司

### <選考委員>

片岡 勝：市民バンク代表

北矢行男：多摩大学教授

木原孝久：住民流福祉総合研究所代表

町田洋次：ソフト化経済センター理事長

### <公開最終選考会で投票に参加した人> 88人

最終選考対象団体 20

上記以外のNPO 26

企業関係者 28

行政関係者 4

学生 6

大学関係者 2

その他(主婦・個人) 2

### \*選考に参加する資格条件

- ①対象となるプロジェクトもしくはその団体に関わっていないこと
- ②事前に対象プロジェクトの申請書を読んでおくこと
- ③選考会には最初から最後まで参加すること

## ■選考結果

次の20件が支援対象になりました。

### <活動支援プロジェクト> (30万円助成)

- ・自殺企図者を対象とした意識調査(心に響く文集・編集局)
- ・「むすび」プロジェクト(こえとことばとこころの部屋)
- ・手軽に出来る介護予防のための健康ボイストレーニング(感声アイモ)

- ・ はまなす生活バスプロジェクト（はまなす「地域交通」研究会）
  - ・ 障がいのある子どものきょうだいクラブ（障害児放課後クラブなかよし）
  - ・ 地域ではぐくむ「クラブハウス」づくり（ばざーる太白社会事業センター）
  - ・ 流産・死産・新生児死で子供を亡くした家族の方へ向け小冊子作り（With ゆう）
  - ・ ヘアスタイルショーを通じてノーマライゼーション！（トリコロール）
  - ・ 介護なんでも文化祭（介護者の会ネットワーク）
  - ・ 障害者とアーティストとのコラボレーションによる作品の「デザイン化」と「商品化」の推進（クーピーファッショナートグループ）
  - ・ 「一人で縫える寿衣キッドの開発」と「サクシード・ファイルの開発」（寿衣を縫う会）
  - ・ 市民参加による八幡山の修景活動の取り組み（八幡山の景観を良くする会）
  - ・ 「医療現場で使う日本語事業」開催プロジェクト（エスニコ）
  - ・ 友達作りの苦手な発達障害者への「話せる仲間」逆プロポーズ作戦（エルマーの会）
  - ・ 障害者の仕事づくりのための福祉作業所と企業のネットワーク構築（とちぎボランティアネットワーク）
  - ・ 外国人の子育て支援ネットワークづくり（多文化共生センター・東京 21）
  - ・ コミュニティ通訳者バンクの構築（女性エンパワーメントセンター福岡）
  - ・ NPO と地域福祉事業者との連携による成年後見引受事業の実現（ユニバーサル・ケア）
  - ・ まちを元気にする市民放送局設立準備プロジェクト（地域と市民の放送局）
- <活動費一部支援プロジェクト>（10万円助成）
- ・ 散歩駅伝の推進（散歩駅伝）

## このプログラムでは、こんなことを大切にしています。

「結びこむ」VOL.5 から転載

### ■事務局と応募団体との仲間関係

このプログラムで心がけているのは、事務局も応募団体と同じ目線で、一緒に考えていくということです。ですから、応募段階でも積極的に相談に乗っています。また、応募してくれたみなさんのアドバイスを活かして、このプログラムをさらに効果的なものにしたいと考えています。

### ■事務局の立場

選考結果の理由を、責任を持って事務局が答えられるように、このプログラムでは第3回から選考の最終決定は事務局が行っています。これは応募団体からのアドバイスの結果です。選考委員の責任にしたりすることはできないように、事務局としても主体的な判断を大事にしています。

### ■金の切れ目が縁のはじまり

資金助成プログラムの多くは、資金助成期間の終了と共に関係が終わってしまうことが多いですが、このプログラムでは資金助成が終わった時から本当のお付き合いが始まると考えています。助成を受けられなかった団体とも、お付き合いを始めたいと考えています。資金助成プログラムは関係づくりの入り口と考えています。

### ■選考過程の透明性と参加性

選考過程をできるだけ公開し、応募団体にも選考過程に参加してもらいたいと考えています。まだまだ不十分ですが、昔の頼母子講のように、応募団体みんなで選びあえる仕組みをつくっていくことが目標です。

### ■大きな福祉の理念

だれでもが気持ちよく暮らせる社会に向けての活動は、すべてこのプログラムの対象になります。コミュニティケアは、さまざまな問題のつながりの中でこそ効果が高まります。取り組みの入り口の課題はさまざまですが、その奥にある共通の理念や姿勢を大切にしています。



## (2) イベント支援

コミュニティケアに関わる団体が主催する「つながり」づくりのイベントに、総額100万円の資金助成を行いました。「つながりづくり」を目指すコムケア活動にとっては、とても重要なプログラムです。こうしたささやかな支援プログラムがもっと広がってほしいと思います。



### ■募集活動

活動支援プログラムの最終選考会での告知を皮切りに、メーリングリストとホームページで呼びかけを行いました。

活動支援プログラムで最終選考に残らなかった団体への応援の意味合いも込めたため、申請プロジェクトを吟味した上で、事務局から応募を呼びかけた団体もあります。

募集期間は、10月16日から11月末日までとしました。

### ■応募状況

応募数は18件でした。これまでのコムケア活動とのつながりのなかで、事務局も企画に参加したものもあります。

### ■選考方法

募集要項に明記した、次の条件を踏まえて、事務局で選考しました。

<対象となるイベント>

- ①「人のつながり」「人のふれあい」の要素があること
- ②自分たちで企画運営する手づくりのイベントであること
- ③複数のコムケア仲間が参加すること

\*コムケア仲間とは、コムケアの考えに共感し、コムケア活動に

参加したことがあるグループを指す。

- ④大きな福祉の理念に即していること
- ⑤活動報告書を作成すること

### ■選考結果

次の10件が支援対象になりました。

いくつかのものに関しては、その後の話し合いの結果コムケアセンターとの共催になりました。

- ・ 市民と企業の遠距離介護公開ミーティング (パオッコ)
- ・ 弱さをもったままお金を稼げる場づくりとは? (ゆいの家)
- ・ つながる・あったかくなる・はっしんする「pot\*cafe」(わかものNPO-Voice of TSUKUBA)
- ・ ユースカフェ in 神戸 (ユースカップ「ユースカフェ in 神戸」実行委員会)
- ・ NPOと社協★協働ミーティング (市民活動情報センター・ハンズオン埼玉)
- ・ 子育て学フォーラム in 埼玉 (子育て学ネットワーク)
- ・ 住民流福祉を考える公開フォーラム (住民流福祉総合研究所)
- ・ コムケアフォーラム in 九州 (共生支援センター)
- ・ コムケア関西交流会 (おんなの目で大阪を創る会)
- ・ これからの病院を考える公開フォーラム (ヒポクラテスの会発足準備会)

## 3. 活動支援プログラム

資金助成プログラムに応募したりコムケア活動に参加したりした団体や個人に対しては、資金助成の対象であるかどうかには関係なく、その活動に対しては原則として何でも相談にのっています。これまで全くコムケアと縁がなかった人に関しても同じように対応しています。それによって、コムケアの目的である支えあいの輪が広がることこそ、私たちの求めていることだからです。

相談内容は多岐にわたりますが、内容によっては各分野の専門家や企業、病院などの協力も得て、対応するようになっています。

### ■申請プロジェクトに関するアドバイス活動

資金助成プログラムの活動支援関係に応募し最終選考に残らなかった団体に対して、結果を報告する際に、も

し希望があれば、最終選考に残らなかった理由と申請内容に関する具体的なアドバイスを個別にさせていただきました。昨年度まではすべての応募団体にコメントをだしていましたが、今年度から希望に応ずることにしました。

簡単なコメントですので、十分なアドバイスにはならないと思いますが、相互支援関係のはじまりになればという思いから、第1回目以来、この活動を継続しています。この活動はその後の交流会などでも話題になり、またそれを契機に交流がはじまるなど、コムケア活動の理念や姿勢を理解してもらう効果がありました。

これまでの資金助成プログラムの多くは、選考過程や選ばれなかった理由などの説明が十分ではなかったが、説明を受けて納得したという声も寄せられています。こうした地道な活動が、資金助成プログラムの効果を高め、市民活動をエンパワーするためにとっても大切であることをコムケア活動を通して強く実感しています。

#### ■資金助成団体との個別意見交換

資金助成団体に関しては、必要に応じて連絡をとりながら、活動に参加したり、相談に応じたりするなどの対応をしました。中間取材のかたちでいくつかの団体に直接訪問させていただき、意見交換しましたが、申請書などではわからない活動の広がりを実感できました。

こうした活動から感ずることは、結局はみんな同じところ（「みんなが気持ちよく暮らせる社会づくり」）を目指しているのだということと、それぞれの活動が触れ合うことによって相互に学びあえることがたくさんあるということです。

また、もっと社会に見えるようにしていくことが大切だとも思います。市民活動にとって、社会に向けてのコミュニケーション活動はとても重要になってきています。

#### ■個別活動相談への対応

資金助成団体以外からの活動に関する相談も引き続き行っていますが、コムケア活動を知って、行政や企業、あるいはコムケア仲間以外の人からの相談も増えてきました。

新聞などでコムケアのことを知り、遠方から相談に来る方もいます。各地にも相談に応ずる窓口はあるのですが、やはり親身になって一緒に考えてくれるところは少ないようです。現在のNPO支援体制に関しても考えさ

せられることが少なくありません。

相談が契機になって、コムケア活動の応援団になったり、活動に参加したりする人も増えています。

#### ■コムケアセンター事務所の開放

本郷にあるコムケアセンターのオフィスを、コムケア仲間に活用してもらうようにしています。市民活動にとっては、場所の確保は大きな課題です。東京のコムケア仲間に対しては、要請があれば、可能な限り、オフィスを開放しています。また、地方のコムケア仲間には、いわば東京のオフィスとして、出張時に活用してもらう便宜も提供しています。

さらに今年度から、コムケア仲間に対するシェアドオフィス構想を打ち出し、一部のコムケア仲間には有償でオフィスとして使ってもらうようにしました。現在、3つの団体が参加してくれています。第4回目で資金助成させてもらった、手がたりの会がコムケアセンターの場所を活用した活動も開始してくれています。

単なる場所としての共同の場ではなく、人的にも活動的にも共創関係が育っていくような、新しいコモンオフィスの実現に向けて、さらに参加者を増やしていきたいと考えています。

## 4. 交流支援プログラム

本プログラムの理念にそって、さまざまな交流の仕組みをつくっています。

#### ■資金助成プログラムに関連しての交流の仕組み

最終選考会は単に資金先を決定するだけのものではなく、そこで他の分野の市民活動がどのような問題意識でどのような取り組み方をしているかを学びあう場でもあります。参加者からは、「全国で同じような思いで活動している仲間がいることを知って元気づけられた」とか「みんな同じような悩みを持っていることがわかって、またがんばる気力がでてきた」という意見が寄せられています。

大勢の前での自分たちの活動紹介やプロジェクト説明をしたことは初めてという団体も多いですが、これからの市民活動にとっては、外部とのコミュニケーション能力は非常に重要です。その意味でも、こうした形での交

流体験は有効だと考えています。

選考会の後の交流会からも毎年、いくつかの新しい出会いと物語が始まっています。

### ■ケアアップカードによる直接応援システム

資金助成プログラム最終選考会で参加者が選考対象団体に直接エールを送る新しい仕組みに挑戦しました。これは、これまで検討課題になっていた相互支援ツールの実験を兼ねたものです。

選考会への参加者に「ケアアップカード」を購入してもらい（1000円）、それを自分が応援した団体に寄付する仕組みです。お金だけではなく、応援のエールの言葉も添えて、知恵や汗の提供もカードに書いてもらうようにしました。

初めてのことであり、心配しましたが、75人の方が参加してくれました。カードのエールをもらった団体からは自分たちの活動への共感を実感でき助成金以上にうれしかったという感想もありました。これに関しては、資料4のコムケアセンターからのメッセージ（最終選考会報告）をご参照ください。

この体験を踏まえて、いわゆる地域通貨のような「コムケア通貨」の可能性を検討していきたいと思っています。

また今回、ケアアップカードを使ってくれた団体の中には、自分たちのイベントでも同じような仕組みを実際に実施したところもあります。

### ■メーリングリスト

電子ネット上でのメーリングリストは参加者が450人を超えました。さまざまな立場の人が参加しているために、議論も活発です。

イベント案内や情報提供などでも活用されていますが、問題にぶつかった人が悩みや問いかけを投げかけると、すかさずさまざまな立場からのコメントやアドバイスが投稿される、とても密度の濃いメーリングリストに育ってきています。「大きな福祉」や「つながり」の視点が強まっているのが特徴です。

あまりにテーマが多岐にわたるので、もう少しテーマを整理してもらえないかという要請も時々ありますが、「大きな福祉」を目指すコムケアとしては、多様な話題や誘いが飛び交うことを大切にしていきたいと考えています。

また、このメーリングリストからテーマ別のメーリングリストや地域別のメーリングリストも生まれだしています。

### ■コムケアサロン

本郷のコムケアセンターのオフィスで、コムケア仲間を中心にした意見交換会を開催しています。徐々に、コムケア仲間がそれぞれ自発的に企画し開催するスタイルに切り替えつつあります。

今年度はその経過時期でもあり、開催が不定期になってしまいました。

参加者はNPO関係者に限らないのが、コムケアの特徴です。そこから意外なつながりが生まれ、新しい物語が始まることもあります。

今年度開催したサロンは以下の通りです。

第24回 「よりあい\*ええげし」(須田正子)(6月7日)

第25回 「社会福祉協議会とNPO」(若尾明子)(8月16日)

第26回 「健康ボイストレーニング感声」(木村紀子・菅原三記)  
(12月5日)

第27回 「みんなで語ろう！子育て支援」(星野一人)  
(1月23日)

第28回 「若者分断の危機!？」(山浦彬仁)(3月14日)

サロンの効用は大きいので、各地でもこうしたサロンが始まらないかと思っていましたが、福岡のコムケア仲間の共生支援センターなど、いくつかのところで、サロン開催の動きが広がっています。



## ■コムケア運営委員会

コムケアをみんなで育てていくためのオープンプラットフォームにしていくために、今年度から運営委員会制度を導入しました。運営委員は、コムケア仲間であればだれでもなれる仕組みで、しかも可能な範囲で運営委員会に参加してもらうようにしました。

今年度の資金助成プログラムの最終選考会はこの運営委員が中心になって、実行委員会を発足させ、発表会も交流会も企画運営しました。

コムケア活動全体の企画運営も徐々にこの運営委員会体制へと移行していく予定です。

それぞれご自分たちの活動が大変であるにもかかわらず、20人近く方が現在運営委員として参加してくれています。運営委員会はまだコムケアセンター事務局が呼びかけて開催していますが、来年度は運営委員会としての独自の開催体制を検討しています。

## ■ニュースレター「結いこむ」の発刊

オンラインのメーリングリストとオフラインの出会いの場、そしてニュースレター「結いこむ」が、コムケア活動を支える3つのメディアです。これらを有機的に組み合わせることで、コムケア仲間のつながりが深まっていくと考えていますが、「結いこむ」の発行は、今年度も2回にとどまりました。

「結いこむ」の制作も、コムケア理念に基づいての「共創型」にこだわっており、コムケア仲間の自発的な企画発行に移行していきたいと考えていますが、事務局の働きかけが弱いためはまだ本格的に移行できずにいます。今年度は自殺対策予防センターライフリンクが第7号を自主制作してくれました。

各地のコムケア仲間が編集を持ち回りする「移動編集部」スタイルへの移行が課題です。

## ■ホームページ

本プログラムは基本的に情報を公開していく姿勢をとっているため、選考過程や支援先プロジェクトの動きなどもできるだけホームページに掲載しています。

コムケア仲間が自由に書き込めるようなホームページのスタイルを検討していますが、今年度はまだ移行できませんでした。

来年度は、共創型ホームページへと全面更新する予定です。

## 5. これからの展望

これまでの5年間の活動を通して、全国にコムケア仲間のコアネットワークが構築されつつあります。

そうした全国に広がりを持ったコムケアのネットワークを、コムケア仲間が主体的に活かしあう、自律型の「オープンプラットフォーム」に育て上げていくことが次の課題です。

そのため、6年目は資金助成プログラムを休んで、ネットワークの整備に努める予定です。

各地での交流会やフォーラム、イベント支援、そしてそれを活かしながらの東京での全国版コムケアフォーラムを通して、芽生えだしたコムケアネットワークを、みんなで効果的に使い込みながら育てていこうと思っています。その最初のキックオフイベントを2006年の夏に予定しています。

幸いに「大きな福祉」の考え方に共感してくださる方々も増えてきていますし、コムケアのネットワークへの関心も高まってきています。しかし、その一方で、資金助成プログラムの問題点やNPO活動そのものの問題点なども見えてきました。

そこで少し立ち止まって、問題の整理をしたいという気がします。

そして、整理ができれば、コムケア仲間のみなさんと一緒に、新しい「結い」（支え合いのコミュニティ）の構想を具体的に考えていこうと思います。

ケアアップカードによる支えあいの仕組みや新たな資金助成プログラムのスタイルの開発にも取り組む予定です。

新しい「結い」の実現に向けて、まずはコムケアセンターを誰でもが使い込めるオープンプラットフォームに育てていくこと。これが次の目標です。

### 新しい結いの構築

結いこむネットワークの創出



# 第2部

## 資金助成プロジェクト活動報告

### 1.活動支援プロジェクト

■ヘアスタイルショーを通じてノーマライゼーション!	14
■自殺企図者を対象とした意識調査	15
■「むすび」プロジェクト	16
■手軽に出来る介護予防のための健康ボイストレーニング	17
■はまなす生活バスプロジェクト	18
■障がいのある子どものきょうだいクラブ	19
■地域ではぐくむ「クラブハウス」づくり	20
■流産・死産・新生児死で子供を亡くした家族の方へ向けた小冊子作り	21
■介護なんでも文化祭	22
■障害者とアーティストとのコラボレーションによる作品の「デザイン化」と「商品化」の推進	23

### 2.活動費一部支援プロジェクト

■散歩駅伝の推進	24
■「一人で縫える寿衣キッドの開発」と「サクシード・ファイルの開発」	24
■市民参加による八幡山の修景活動の取り組み	25
■「医療現場で使う日本語事業」開催プロジェクト	25
■友達作りの苦手な発達障害者への「話せる仲間」逆プロポーズ作戦	26
■障害者の仕事づくりのための福祉作業所と企業のネットワーク構築	26
■多文化子育てネットづくり	27
■コミュニティ通訳者バンクの構築	27
■NPOと地域福祉事業者との連携による成年後見引受事業の実現	28
■まちを元気にする市民放送局設立準備プロジェクト	28

### 3.イベント支援

■弱さをもったままお金を稼げる場づくりとは?	29
■つながる・あったかくなる・はっしんする「pot*cafe」	29
■市民と企業の遠距離介護公開ミーティング	30
■ユースカフェ in 神戸	30
■子育て学フォーラム in 埼玉	31
■コムケアフォーラム in 九州	31
■コムケア関西交流会	32
■NPOと社協★協働ミーティング	32
■これからの病院を考える公開フォーラム	33
■住民流福祉を考える公開フォーラム	33

## ■トリコロールコレクション：ヘアスタイルショーを通じてノーマライゼーション！

### トリコロールコレクション実行委員会

団体名 トリコロールコレクション実行委員会  
代表 清田仁之  
設立 2005年4月1日  
目的 身体・知的・精神しょうがいを持つ人々を支援する「平均年齢28歳の福祉未熟者」たちの専門領域を超えたネットワーク組織。目指すは福祉のそのもののバリアフリー。  
所在 兵庫県尼崎市



#### ○プロジェクトの目的と概要

トリコロール代表の清田仁之さんは、卒業後、企業に就職し接客業務をしていたが、2年で会社を辞めてしまった。無意識に客の値踏みをするようになってしまった自分がいやになったからだ。そして福祉の世界に入ろうと専門学校に入り直した。そこで知ったのは施設で暮らしている人たちの生活の実態だった。その人の暮らしのまわりの環境が、目の輝きを変えていくことにも気がついた。

現在、清田さんは西宮の重症心身障害支援のNPOに所属し、どんなに障害が重くても地域で生活したい！外出したい！一人暮らしをしたい！という人の生活支援をしている。その活動を通して、既存の福祉制度ではカバーできない、実際の生活場面でのバリアが数多く存在していることに気づきだした。そこで、さまざまな施設で働いている若い世代に勉強会を呼びかけたところ、すぐに11人が集まった。トリコロールの誕生である。「現場でバリバリやっているユースのヨコのつながりがあれば本人さん支援をする上で、スゲーいい」というのが清田さんの動機だった。

しかし、勉強会では長続きしない。そこでみんなが一緒になってイベントをやることになった。それが今回のプロジェクト、トリコロールコレクションである。障害を持つ人たちもモデルになって参加するヘアスタイルショーだが、さまざまな人たちが準備し交流するプロセスを通して、つながりを深め広げていくことが一番の目標だった。

#### ○活動内容と成果

メンバーはみんな忙しいため、役割分担をし、メールやブログを活用して、準備を進めた。しかし次第に協力者も増えてきた。障害を持つ人たちにも事前に美容室体験をしてもらったが、それを契機に4つの美容室が協賛してくれることになった。神戸芸術工科大学の学生もポスター作りをはじめ、当日もスタッフとして大活躍してくれた。

こうしたイベントは会場の雰囲気 중요하다。いわゆる「福祉っぽい」ものにはしたくないというのがみんなの考えだった。イベントはワクワクするようなものでなければ参加してもらえないことをみんなよく知っていた。

30近い会場を見てまわった結果、選んだのがちょっとお酒

落な酒蔵通り煉瓦館だった。この会場を選んだおかげで、煉瓦館を所有する地元企業の日本盛ともつながりができた。

当日は120人を超す参加者で、大盛況になった。障害を持つ人たちと福祉施設の職員や学生など23人がモデルになってのスタイルショーに続いて、トークショー、さらには参加者全員でマカレナダンス。会場は熱気に包まれ、感動の涙を流す人も少なくなかった。

参加者から「本当に地域を巻き込んだ若者らしい人間賛歌イベントだった」と喜んでもらえたのがうれしかった。

参加してくれた美容師も、「障害がある人のカットやメイクは初めて。実際にやりとりをして、おしゃれをしたい気持ちが伝わってきた」と喜んでくれた。ここで知り合った障害を持つ人たちの何人かは、美容院の新しいお客さまになってくれた。

ともかくすべてをみんなでやろうという清田さんたちの思いは、見事に成功した。新しいつながりがたくさん生まれたのだ。

#### ○これからの展開

イベントの最後にこれまでの経緯を画像で流したが、最後のテロップは「笑顔が出会って繋がって・・・はじまりは、いま」だった。

このイベントに参加した人たちにとって、まさにこの日は新しい物語の始まりになったようだ。「『しょうがい』という言葉意識すること自体がバカバカしい。自分たちもつながろうとすればつながれる。楽しそうな人を見て楽しくなる自分がある。その自分を見て楽しくなる人がある。その連鎖でみんなが、社会が、世界が笑顔になれる」ことを清田さんは改めて実感した。その思いはきっと、参加者みんなのものだろう。清田さんは、このイベントを通してコムケアの「大きな福祉」の考えがよくわかったと言ってくれた。

最近、清田さんが車イスを押して町を歩いていたら、見覚えのある美容師の方から声をかけられた。こういう風景がもっともっと増えてほしいと清田さんは思っている。

## ■自殺企図者を対象とした意識調査事業 特定非営利活動法人 心に響く文集・編集局

団体名 特定非営利活動法人心に響く文集・編集局  
代表 茂 幸雄  
設立 2004年5月12日  
目的 自殺の名所といわれる福井県東尋坊で自殺防止活動に取り組み、人生再出発のための各種支援活動を行なっている。  
所在 福井県福井市  
ホームページ <http://kokoronihibike.kt.fc2.com/>



### ○プロジェクトの目的と概要

年間 100 万人近い観光客が訪れる福井の東尋坊は、自殺の名所とも呼ばれ、毎年 20 ～ 30 人の自殺者が出るところでもある。警察に勤めていた茂幸雄さんが、東尋坊を管轄する三国警察署（現坂井西警察署）の副署長に赴任してきたのは定年退職の1年前。それが茂さんの人生を変えてしまった。

定年までの1年間、茂さんは自殺予防に向けて様々な活動に取り組んだが、行政だけでは限界があることを実感した。そこで、定年退職後、自殺を思い立った人を思いとどまらせる「命の灯台」の役割を果たしたいとNPOを立ち上げた。それが「心に響く文集・編集局」である。

そして、退職金の一部を投入して東尋坊入り口の空き店舗に相談所を開設し、パトロール活動を開始した。以来、100人近い自殺企図者に遭遇し、自殺を思いとどまらせることに成功しているが、そうした活動を通して生々しい情報がたくさん蓄積されてきた。

日本では毎年3万人を超す自殺者がでていのに、効果的な自殺予防対策が進んでいない。その一因は、自殺企図者の実態が把握できていない点にある。確かに自殺企図者の意識調査は難しい。しかし、茂さんたちならば、本音での意識聴取も可能である。すでにこれまでの活動を通してたくさんの情報も蓄積されている。それらを整理分析して、効果的な自殺防止対策への一助にしていこう。これが今回のプロジェクトである。

### ○活動内容と成果

意識調査といっても、アンケート調査で情報が得られるわけではない。相談と巡回を通して遭遇した自殺企図者との心を通わせた会話から情報を得ていくことになる。相談所は、観光客が去り、土産物店も閉まった午後8時ごろまで開いているが、茂さんの活動拠点は相談所だけではない。相談所とは別に、東尋坊タワーの下に「心に響くおろし餅」のお店も開いている。

福井には年の瀬などに家族みんなで餅をつき、最後に大根おろしに浸した餅を食べる風習がある。「おろし餅には、家族のことを思い出し、自殺を思い止まらせる力がある」と茂

さんは考えて、自殺企図者をこのお店に連れてきてお餅を出してやるのである。このおろし餅が悩みを抱えている人たちに温もりを与え、故郷や家族を思い起こさせ、多くの人の命を救ってきたのだ。

今回、これまで蓄積してきた情報を整理して、これからの自殺予防活動に参考になるヒントがいくつか得られた。一つだけ紹介してみよう。

東尋坊は自家用車による観光客が多いが、自殺企図者のほとんどは公共交通でやってくる。自動車を残すことで身元が早く判明したり、車の引き上げなどで関係者に迷惑がかかったりすることを避けたいという思いが感じられるという。金・土・日に集中しているが、これも周辺関係者に仕事を休ませて対処させることになってはいけないという配慮ではないかと茂さんはいう。自殺企図者の多くは、社会への迷惑を考えているようだ。これは大きなヒントだろう。

### ○これからの展開

整理された情報は小冊子にまとめられ、関係機関に配布された。当事者情報に基づくものなので、貴重な情報である。もし本気で自殺予防に取り組むのであれば、こうした事実をしっかりと把握し、具体的な予防策へとつなげていかねばならない。

「心に響く文集・編集局」の活動は会員の負担で展開されている。現在、50人近い会員が無償で参加しているが、運営には場所の賃借料や交通費のほか、保護した人の当面の食費や宿泊費などにかかる。茂さんたちの個人負担はすでにかなりの額になっている。

茂さんは「行政による防止体制が整うまで『つなぎ』の役目を果たそうと始めたが、もう限界に近い」と訴えている。行政や産業界が、こうした活動にもっと目を向け、経済的支援をしていくことが望まれる。いや、むしろ産業界と行政とでしっかりしたプロジェクトを組んで、「心に響く文集・編集局」に業務受託をしていくべきだろう。

そうなるまで、茂さんたちにはもう少し健闘していただきたいと思っている。

## ■「むすび」プロジェクト

### 特定非営利活動法人 こえとことばとこころの部屋

団体名 特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋  
代表 上田假奈代  
設立 2003年3月1日  
目的 アートを有効な伝達手段としてとらえ、「表現」を通した個人の自立・自律を育む事業を行なうとともに、ニート、ホームレス、障害者など社会的な問題に取り組んでいる。  
所在 大阪府大阪市  
ホームページ <http://www.kanayo-net.com/cocoroom/>



#### ○プロジェクトの目的と概要

「こえとことばとこころの部屋」では、「表現」を通した個人の自立・自律を育む事業に取り組んできたが、2004年、大阪・西成地区に暮らす生活保護受給者の紙芝居劇グループ「むすび」と出会い「このおじさんたち面白いなあ」と勝手に応援しはじめた。

西成地区の福祉マンションなどで生活している生活保護受給者たちは、自室に引きこもりがちで、社会との接点がほとんどないが、一部の有志たちが取り組んでいるのが、この紙芝居劇活動だ。彼らはまた、学者や研究者などから頼まれて、ホームレスの多い西成ツアーの案内もしている。彼らの多くはホームレス体験者でもあるのだ。

しかし、彼らには紙芝居劇公演や案内業務をプロデュースする力は乏しい。そこでいつしか、マネージャーやアーティストを派遣したり、彼らの相談にのったりしているうちに始まったのが今回の「むすび」プロジェクトである。

プロジェクトを推進していくために「むすびバックアップ事務局」を発足させ、「むすび」の活動を支援しながら、マネジメントができる社会意識を持った人材を育てることが今回のプロジェクトの目的である。

#### ○活動内容と成果

「むすびバックアップ事務局」の発足によって、「むすび」のメンバーの活動は質量ともに充実してきた。「西成案内ツアー」も事業として本格的にスタートし、大学などからの視察や取材も多くなった。これはむすびメンバーの自信にもつながっていった。

紙芝居に関しては、専門家を派遣してワークショップを開催したり、パフォーマーやダンサーなどのアーティストを派遣したりして、メンバーの表現力を高めることにつとめた。この結果、月平均1回ほどだったむすびの公演は、現在では3～4回となり、チケット売上げも増えてきている。

「こえとことばとこころの部屋」がプロデュースした日独シンポジウム「ホームレス問題の現状と課題」でも「むすび」が紙芝居を上演。ホームレス支援のための自律的な表現活動として高い評価を受けた。

こうした活動の成果が認められ、「大阪府草の根人権活動賞の奨励賞」も受賞。さらには、アワープラネットTVの支援により、「むすびプロジェクト」の記録映像を制作し、ネット配信が4月より開始された。最近では、メンバー自らの人生経験を活かしたテーマの紙芝居制作にも取り組んでいる。ホームレス問題に関心のなかった学生が、このプロジェクトにインターン参加したのがきっかけで、今でも、むすび事務所に通っているというようなことも起こっている。

また、マスコミに働きかけた結果、いくつかのテレビが取り上げてくれ、むすびプロジェクトへの理解も急速に広がっている。

#### ○これからの展開

プロジェクトが有名になったおかげで、引き続き資金助成も得られることになり、専門家やアーティストの派遣日数は増加できそうだ。メンバーの高齢化やギャンブル依存性という問題はあるが、これからも日常のケアを行いつつ、むすびメンバーの特徴を発揮する新作紙芝居を制作、発表していく予定である。メンバー内部の人材も少しずつ育ちだしている。

むすびが有名になったために起こった問題もある。別の団体が思いつきで作品制作に関わってきたり、テレビでクローズアップされた一部の仲間への嫉妬が出てきたり、などである。前者に関しては、それを契機にむすびメンバーとの目標設定の確認の話し合いを始めることになり、むしろいい方向に向かうことができた。嫉妬の問題も時間とともに落ち着いてきた。問題はこれからも出てくるだろうが、それらを克服していける基盤が育ってきている。

「ホームレス問題は、福祉、医療、教育、まちづくりなど、多岐にわたる分野からの取り組みが必要。それらの分野をつなぎ、市民意識を高めるために、アートのアプローチは有効だ」とむすびバックアップ事務局の飯島秀司さんは考えている。

このプロジェクトが、ホームレス問題解決に向けての新しいモデルになっていくことを期待したい。



## ■いつでも・どこでも・だれでも手軽に出来る介護予防のための健康ボイストレーニング 特定非営利活動法人 感声アイモ

団体名 特定非営利活動法人 感声アイモ  
代表 木村紀子  
設立 2004年6月4日  
目的 環境と福祉と教育を一体化させた感性教育で障害者の社会自立訓練及び高齢者の健康維持・向上を進め元気な生活の実現を支援し、社会を元気にしていくこと。  
所在 千葉県鎌ヶ谷市  
ホームページ <http://www.npo-aimo.org/>



### ○プロジェクトの目的と概要

「『障害』という言葉に惑わされて真実を見失ってはいけない。才能を見抜き、成長させる力を養い『障害』という言葉自体を無くしたい」。これが感声アイモ設立の動機である。さまざまな障害を持つ人たちと関わってきた体験を通して行き着いたのがこの理念だった。

アイモの強みは、実践活動の中から自らが開発してきた独自の感性教育手法である。特に、アイモ式発声法。腹式呼吸を基本にして、日本語を一文字ずつはっきりと発声していく発声訓練法で、アイモではこの方法による発声を「感声」と呼んでいる。その発声練習を積み重ねることで、心と身体が元気になっていくことに関してはすでに多くの実績を積み重ねている。

言葉でのコミュニケーションがほとんどできなかった全身麻痺を持つ青年が、半年の「感声」訓練で600人の観客の前で朗読公演ができるようになったり、脳硬塞で言語障害に陥った高齢者が「感声」のトレーニングで電話での会話ができるようになったり、アイモ自身が驚いてしまうような逸話がある。

「感声」トレーニングの成果を目の当たりに見た医学博士が、現在、科学的な検証作業を進めているが、とにかくトレーニングに参加した人たちは元気になってしまうのだ。トレーニングは決して難しくなく、基本さえ身につければ自宅で一人でもできるという。

今回のプロジェクトは、その「感声」の効用を多くの人たちに知ってもらうために、「感声」トレーニングのテキスト作成と具体的訓練法を普及啓蒙するためのセミナーの開催である。

### ○活動内容と成果

「感声」トレーニングの課題は、体験してみないとなかなか効果を実感してもらえないことだ。実践を通して開発しているのに、これまではテキストもなく、言語障害の人がなぜ話せるようになるのかの科学的説明も十分ではなかった。そのため実際に話せるようになった人が体験談を話すことで納得してもらいながら口コミで普及してきた。

そこで今回はまず、これまで蓄積した成果をテキストにまとめるとともに、短時間の体験で心身ともに元気になる健康ボイストレーニング体験版のセミナーを開催し、感声トレーニングのプログラム開発に取り組むことになった。並行して指導講師の育成にも取り組んだ。

幸いに、千葉県社会福祉協議会主催の研修での感声トレーニングが好評で、各地からの問い合わせが増えだし、セミナーも活発になってきた。これまで蓄積してきたノウハウをまとめた感声トレーニングのテキストも完成した。ボイストレーナーも第1号が誕生。それらの成果の集大成として3月に開催した千葉県鎌ヶ谷市でのセミナーには150人の参加者があった。プロジェクトは順調に進みだした。

### ○これからの展開

感声トレーニングの訓練方法は、呼吸と発声のコツを覚えるだけである。自力呼吸できる人であればだれでも気楽に参加でき、楽しい雰囲気の中で知り合いも増えていく。しかも、「美しい日本語は体を元気にするだけではなく、美しい心を磨く効果がある」という。

しかし何回もセミナーに参加するのは大変だ。そこでアイモでは、いつでもどこでも手軽に楽しみながら出来る訓練方法の指導と普及に力を入れている。

「この訓練によって身体の機能強化だけでなく、人に好かれる美しい声になる。これこそ『暮らしの中の介護予防・予防医療』『地域の楽しい人間関係づくり』を実現する理想的な事業」(アイモ)ということへの共感が広がりだし、最近はセミナーの依頼も増えてきている。

実践から生まれた感声トレーニングは、参加者が増えれば増えるほどノウハウやスキルは蓄積されていく。訓練方法もさらに向上していこう。

こうした実績を踏まえて、知的・精神分野の障害を抱える人たちのコミュニケーション訓練や社会活躍訓練、高齢者が地域で一緒に生活できるノーマライゼーション社会の実現に向けての介護予防活動など、感声アイモの夢はますます大きくなってきている。これからの展開がとて楽しみである。

## ■はまなす生活バスプロジェクト-情報ネットワークづくり-

### はまなす「地域交通」研究会

団体名 はまなす「地域交通」研究会  
代表 丸田秋男  
設立 2003年1月7日  
目的 新潟市の北地区で、赤字バス路線の廃止問題をきっかけに、住民主体による地域交通を実現するために立ち上がった住民有志の団体。  
所在 新潟県新潟市  
ホームページ <http://www.geocities.jp/pwqbt700/hama-top.htm>



#### ○プロジェクトの目的と概要

はまなす「地域交通」研究会は、新潟市北地区の地域活性化を目指すはまなす学会から生まれた住民組織である。代表の南さんは新潟県庁の職員だが、この活動には、仕事と全く関係なく住民として取り組んでいる。

この地域はもともと交通の便はよくない地域だったが、赤字バス路線の廃止が決定されたことで問題はさらに深刻になった。そこで、はまなす学会で地域バスの話を切り出すと20人くらいの方が関心を示したのである。こうしてはまなす「地域交通」研究会が誕生した。

地域交通の問題は、住民の生活を大きく規定し、コミュニティのあり方に深くつながっている。バス会社や行政だけに任せておいていい問題ではない。住民自らが地域交通のあり方を考え、自分たちでできることは自分たちで担っていくことが、自律的なコミュニティにつながっていくのではないかと、これが南さんの思いだった。そうしたビジョンに向けて一歩踏み出すことが今回のプロジェクトの目的である。

#### ○活動内容と成果

住民意識についてはすでに住民対象にアンケート調査を実施しており、4割以上の住民がバスの利用を希望していることがわかってきた。各地の先進事例調査を終えていたので、それらをベースに、具体的なバス路線の検討を行い、事業計画を策定した。策定にあたってはバス会社にも協力してもらい、経費見積もりも行った。

そうした事業計画案をもとに、住民や自治会への説明会を行ったが、地域の住民組織が運営に責任を持ちながら、地域活性化につなげていこうという呼びかけには、共感する人がいる反面、「理想論」だとして敬遠されることも多かった。バスを実際に運行していくには、年間1000万円単位の資金が必要になり、住民団体にとってはハードルが高すぎるのも事実である。任意の住民組織ではなく、自治会を巻き込んだ地域活動組織にしていく必要があるが、その難しさを改めて認識することになった。

並行して、研究会のホームページを開設し、情報ネットワー

クづくりに取り組んだ。研究会の取り組みを発信し、住民の自由な意見交換の場にしていくことが狙いだった。さらに3月には、事業計画案を住民に発表し、住民の主体性を喚起するための啓発フォーラムも開催した。しかし、いずれも思うようには住民を巻き込めず、ここでも住民主体での活動の難しさを実感することになったという。

まちづくりとは時間のかかるものである。任意の住民組織でここまで進めてこられたのは高く評価していいだろう。地域交通に関する住民の関心を高め、その実現に向けてのさまざまなアイデアが蓄積されたことの意味は大きい。最初の一步は、間違いなく動き出した。

#### ○これからの展開

昨年、新潟市は広域合併により約80万人の大都市となった。2007年には政令指定都市を目指しているが、これに伴い区制が導入され、北地区も旧豊栄市と1区を形成することになり、新たに行政による区バス構想が浮上してきた。区バス路線は、地域ニーズをもとに議論されることになるが、本研究会が提案している路線と重複することが十分予想される。

こうした状況変化を踏まえて、はまなす「地域交通」研究会は、これまでの研究成果を、新たな区バス構想にできるだけ取り入れてもらうとともに、地域住民が担う仕組みを組み入れることによって、「地域活性化につながるバス」構想の実現を目指すことになった。形は違ったものになるだろうが、結果的には目的実現に近づいたと言っていい。

新しい区バス構想に、地域のニーズをきめ細かく埋め込んでいくことも大切だが、地域が担うべき部分をどれだけ住民が引き受けられるかが、それ以上に大切である。バスをただの輸送手段にとどめず、地域づくりに向けての住民たちの活動のステージとして、どれだけ効果的なアイデアが提案できるかがこれからの課題である。

そのためには、もっと提案力や実行力のある組織へと自らを変えていかなければならない。はまなす「地域交通」研究会がこれからどう進化するか、楽しみである。

## ■障がいのある子どものきょうだいクラブ 特定非営利活動法人 障害児放課後クラブなかよし

団体名 特定非営利活動法人障害児放課後クラブなかよし  
代表 増田さえ子  
設立 1997年4月  
目的 障害のある子どもたちに対し、放課後および土曜日や長期休暇の「居場所」を提供し、集団の中で過ごすことで、一人ひとりがその子らしく成長していくことを支援すること。  
所在 埼玉県朝霞市  
ホームページ [http://www.geocities.jp/nakayoshi\\_club2004/](http://www.geocities.jp/nakayoshi_club2004/)



### ○プロジェクトの目的と概要

障害児放課後クラブなかよしは、障害を持つ子どもたちが放課後や長期休暇中も楽しく豊かな生活を送れるよう、朝霞市内の特殊学級に通う児童の親が中心になって立ち上げたNPOである。単に「居場所」を提供するだけでなく、異年齢の集団の中で協調性や社会性を身につけさせ、自立への支援をしていくことを目指している。楽しいことをたくさん用意しているのが、「なかよし」の自慢だ。

障害を持つ子のいる家庭は、その子の療育や自立のための手助けや通院通学などで親の手がかかりきりになり、どうしてもその他の兄弟姉妹は犠牲になりがちである。そういう現状を打開すべく、そこに関わる兄弟姉妹が思いきり楽しめる参加型のきょうだいクラブを結成し、さまざまなレクリエーションを企画展開していこうというのが今回のプロジェクトである。

当面の目標は、まず障害のある子どもの兄弟姉妹が心から楽しめる場をつくることである。

### ○活動内容と成果

現在、「なかよし」には12名の利用者がいるが、そのきょうだい（兄弟姉妹）は14名。

一口に障害を持つ子のきょうだいといっても、家庭環境は様々で、年齢も幅広く、普段あまり接点のない子どもたちが、同じ空間で活動することはなかなか困難だ。それに親が一方向的に企画しすぎると押し付けになってしまう、逆効果にもなりかねない。できれば、子どもたちが中心になって企画運営し、親はその手伝いにとどめる形が望ましい。会員家族だけではなく、地域の子どもたちも参加してもらえよう形を目指したい。そんな思いをもって、まずは試験的な活動からスタートした。

最初の活動は近隣の公園でのお遊び会だった。学童保育のお出かけ行事のある日に、親達の講座であるクリスマスリースづくりに使う松ぼっくりを拾うため、きょうだいたちを誘うことにした。7人が参加し、親も一緒になってお昼をはさんでのお遊び会になった。地域の子どもも一人参加してくれた。親も多数参加したが、これまでとはちょっと違った交流ができたことも大きな成果だった。

次に行ったのがボウリング大会。事業の一環である勉強会の日に、スタッフとして関わる親の子どもたちが、ボランティアの学生と一緒にボウリングを楽しむことにした。障害を持つ自分たちのきょうだいに関わっているボランティアの学生との交流は、きょうだいたちにとっても良い体験になった。

こうして活動は少しずつ前進しているが、それにつれて、異年齢の子どもたちが一緒に活動することの難しさもわかってきた。スタッフを担ってくれるボランティアの開拓も大きな課題になった。この活動をさらに充実させていくためには外部に向けての情報発信やネットワークづくりも必要になってくるだろう。

### ○これからの展開

障害を持つ子ども本人には行政などによる援助があるが、そのきょうだいに関しては忘れられがちである。身内に障害を持つ人がいるという状況は、当事者しかわからない心の動きや葛藤を生み出すものだ。そしてそれは親ですら本当に理解することはできない。

このプロジェクトが、同じ悩みを抱えたきょうだいたちの接点をつくることによって、そういう問題の解決にもつながっていければ、「なかよし」にとっては大きな成果といえるだろう。

今年は、親の活動が忙しくなる時期を中心に、きょうだいたちのイベントを行う計画である。5月の「なかよし」主催のフリーマーケットで、きょうだいを対象とした「パン作り教室」を開催。また夏休み中には一日遠足や宿泊活動なども取り入れていきたいと考えている。

「きょうだいにスポットを当てた取り組みや活動は少しずつ増えていますが、私たちは地域に根ざした子どもたちのつながりを大切に、地域に開かれた法人の理念をもってきょうだいの子どもたちにも豊かな生活を送ってほしいと願います。この活動が、どんな人でもそこにいるのが当たり前になるまちづくりのささやかな力になることを期待しています」という豊喜さんたちの思いは、着実に前進していくに違いない。

## ■地域ではぐくむ「クラブハウス」づくり 特定非営利活動法人 ばざーる太白社会事業センター

団体名 特定非営利活動法人 ばざーる太白社会事業センター  
代表 齋藤 茂  
設立 2005年4月18日  
目的 障害者及び高齢者・児童等が地域で、分け隔てのない生活ができる幅広い環境づくりに寄与すると共に、社会参加を目指すための支援を行うこと。  
所在 宮城県仙台市  
ホームページ <http://www.b-taihaku.net/>



### ○プロジェクトの目的と概要

「現場のニーズから出発する!」。これが、ばざーる太白社会事業センターの合言葉である。今回のプロジェクトも定期的に開催しているセミナーの参加者の声から生まれたものだ。現場の人の声はいつもニーズに裏付けられている。

「ばざーる太白」が活動している地域でも、高齢化する団地や空き家の増加が大きな問題になってきている。そんななかで、空き家を活用して気軽に立ち寄れる場(クラブハウス)をつくり、高齢者の生活支援ができないかという声が出てきた。そういう場所があれば、個人や地域のニーズももっと見えてくるし、効果的な支援もやりやすくなる。集まった人たちを「動機づけ」できるプログラムがあれば、みんなもいろいろと動きだすだろう。地域のみんなで育てていくような、そんな「クラブハウス」ができれば、住民も地域も元気になるはずだ。

「ばざーる太白」は、これまでも他の団体と一緒にさまざまな活動を展開してきた。今回のクラブハウス店長になった泉田文陽さんも福祉住環境ネットワークみやぎのメンバーとして住宅相談などを行っている。他にも、三河や(御用聞き)、ゆめつむぎ(介護福祉関係)などさまざまなNPOと連携して活動を行っているのが「ばざーる太白」の特徴である。現場のニーズから考えていくと、どうしてもそうしたネットワークでの活動が必要になってくる。

そのネットワークも活かしながら、今回取り組むクラブハウスを、地域住民のさまざまなニーズに応えられる「福祉のコンビニ」にしていこうというのが代表の齋藤さんの思いだった。

### ○活動内容と成果

2005年11月、クラブハウスは開店した。地域で親しまれている山の名前をそのまま借りて「恐竜やま」と名付けた(松林の並木が恐竜の背中に見えると地域の小学生たちに親しまれている)。地域に親しまれる場にしたいという思いが伝わってくる。

「恐竜やま」には15畳ほどのフロアと6畳の和室スペースがあるが、道路側がガラス張りなので通りからも中が見えるようになっている。フロアと和室は段差解消機でバリアフリーになっている。

まだ、スタートしたばかりで利用者も少ないため、週2回の開店にとどまっているが、徐々に開店日を増やしていく予定だ。利用料金は1回120円、おいしいコーヒーが飲める。集まった人たちで話題は自然と決まるような、気楽な話し合いの場を目指している。そうした話し合いのなかから、イベントが企画されることもある。地域の集まりにも開放されている。目指すところは「地域が育むまちづくりの拠点」だが、まずはとにかく気軽に立ち寄れるみんなの場所にしていきたいと考えている。

もちろん、地域の多様なニーズを発掘し、利用者を増やしていくために、介護予防につながる健康運動や福祉防災マップづくりなど、新しい企画にも取り組んでいる。

### ○これからの展開

クラブハウス「恐竜やま」はまだ始まったばかりだ。利用者はまだ少ないが、下校途中の小学生が立ち寄ってくれるなど、徐々に地域の中に溶け込みだしている。「他では嫌がられるが、ここでは自然と愚痴がこぼせる」と言って、常連になった男性もいる。開店日をもっと増やしてほしいという声も届き始めた。「恐竜やま」は着実に地域が育むクラブハウスに向かっている。

クラブハウスの立ち上げは、地域住民や他のNPOと一緒に手作りして進めてきた。当初の運営は、ばざーる太白が中心になっているが、「ぼちぼち」と地域のみんなが支え合う自主運営に移行していく方針だ。そして、「恐竜やま」をモデルにして、地域ではぐくむクラブハウスの2号店、3号店をつくっていく計画だ。

「恐竜やま」に地域の人たちが集まりお茶を飲みながら賑やかに話し合う風景が浮かんでくる。そして、その話し合いの中から、もうひとつの「恐竜やま」が生まれていく。とてもうれしいビジョンである。

地域ではぐくむクラブハウスこそ、これからの住民主役の地域福祉のモデルかもしれない。



## ■流産・死産・新生児死亡などで子どもを亡くした家族の方へ渡す小冊子作り

### With ゆう

団体名 With ゆう  
 代表 佐藤由佳  
 設立 2002年5月1日  
 目的 流産・新生児死で子供を亡くした親が、この分野でのケア活動を充実させていくとともに、子どもを亡くした親同士が寄り添える場づくりをしていくこと。  
 所在 宮城県仙台市  
 ホームページ [http://www.geocities.jp/withyou\\_845/](http://www.geocities.jp/withyou_845/)



#### ○プロジェクトの目的と概要

With ゆうは、誕生死（流産・死産・新生児死など）で子どもを亡くした親たちが、インターネットを通じて知り合い結成した会である。自分たちが感じた孤独や苦しみ、戸惑いを医療関係者に伝えていくとともに、子どもを亡くした親同士が寄り添える場づくりに取り組んでいる。

子どもを亡くした親に対しケアを行なっている病院はまだ少なく、退院してからも1人で孤独や悲しみを抱えている人は多いが、同じ体験をした仲間がいるだけで、世界は変わってくる。With ゆうのメンバーは、自らの体験からそれをよく知っている。

宮城や東京など各地での集まりも開いているが、活動は主にインターネット。しかし、インターネット環境のない人や、こういう活動を知らない人はまだ多い。

そこで、自分たち遺族の想いを小冊子にして、ケアに積極的な病院に置いてもらい、子どもを亡くした親に渡してもらおうと考えた。これが今回のプロジェクトである。家族には、その小冊子を参考に、亡くなった子どもとの思い出をたくさん残してほしいし、医療関係者には、経験者の想いを通じて、ケアや思い出を残す事の大切さについて考え、患者の想いに寄り添った看護に取り組んでもらいたい。これが、このプロジェクトの目的である。

#### ○活動内容と成果

活動に先立ち、日本未熟児新生児学会に参加し、病院における誕生死ケアの実態について医療者にアンケートを実施した。病院でのケアの働きかけの必要性を改めて実感するとともに、体験談を小冊子にして配布していくことの意義が再確認できた。

そこで、With ゆうのメンバーで編集チームを発足させ、枠組みを検討し、メンバーに体験談を募集。テーマによっては、これまでの活動で知り合った経験者に原稿をお願いした。体験談には、できるだけ子どもを亡くした親へのメッセージをこめてもらうようにしてもらった。

体験談が集まったところで、医療者や体験者に読んでもらった。問題の性格上、受け取る人の印象も大きく違ってくるため、できるだけ多くの関係者に見てもらい、表現や編

集には十分気を使うことに心がけた。

意見交換を通して、さまざまな考え方や受け止め方があってもわかってきた。周囲の人は、時間がたてば忘れられると言うが、当事者にとっては決して忘れられないことでもあることも改めて確認できた。

また、体験を伝えていくためには、想いをそのまま書くのではなく、相手の状況を思いながら相手の心に負担を掛けないような言葉を選ぶことが大切だということも学んだ。これは普段の活動の中でもとても大切なことである。

こうして完成したのが、「大切な赤ちゃんとお別れしたお父さん・お母さんへ」。たくさんの思いのこもった小冊子だ。このプロジェクトを通して With ゆうの絆を深め、仲間を広げることができたのも大きな成果だった。

#### ○これからの展開

問題は、実際にどのくらいの病院がこの冊子を置いてくれるのかだ。この分野のケアはまだ始まったばかりなので、病院との交渉もそう簡単ではない。まずは交流のある医療従事者がいる病院に置いてもらうよう働きかけていくことにしている。また、6月に横浜で開催される SIDS（乳幼児突然死症候群）国際会議に出展し、医療関係者に広く冊子の存在を伝えていく予定だ。ともかくできるだけ多くの人たちに、この冊子を知ってもらうことが課題である。

ケアがこの冊子を渡すことのみならずされてしまわないかという不安もある。この冊子はあくまでも遺族としての体験談なので、医療者によるケアとは別のものだ。医療者には医療者にしかできない患者に寄添うケアを考え、実践してほしい。この冊子が、そうした活動への契機になってほしいと With ゆうのメンバーは願っている。

今回作成した小冊子の最後には、こんな文章が書かれている。

「あなたはひとりではありません。（中略）  
 忘れなくてもいい。急いで前に進まなくてもいい。いっぱい涙をながしたっていい。一步一步。ゆっくりと、時には立ち止まりながら、思い出に寄添いながら……。」

課題は山積しているが、活動は着実に前進している。

## ■市民発!介護なんでも文化祭 介護者の会ネットワーク

団体名 介護者の会ネットワーク  
代表 竹内弘道  
設立 2003年4月1日  
目的 首都圏各地で活動する介護者の会や家族会など16団体の連合体。情報交換、相互扶助を目的に、定期的に「介護者の会ネットワーク会議」を開催している。  
所在 東京都港区  
ホームページ <http://www12.ocn.ne.jp/%7EArain/bunkasai/bunkasai2.html>



### ○プロジェクトの目的と概要

2005年11月3日、文化の日。東京の西新宿にあるスペースセブンで、「市民発!介護なんでも文化祭」が開催された。600人もの参加者が訪れ、熱気に溢れた盛況なお祭りになった。

主催したのは、介護者の会のリーダーたちでつくっている組織「介護者の会ネットワーク」。その集まりで「介護者の立場からイベントをやりたい」という声があがったことがきっかけだった。

「介護者の会ネットワーク」は、ケアする人のケアを目的に活動しているNPO介護者サポートネットワークセンター・アラジンの呼びかけで始まった集まりだったこともあり、文化祭の事務局はアラジンが担当することになった。

準備は3月から始まった。楽しいイベント、お祭りのイベント、そして誰でも入れる開かれたイベント。これが当初からのみんなの思いだったが、打合せを重ねる中で次の4つのコンセプトが確認された。

- ①新しい介護文化を創造する
- ②現在介護で困っている方のためのガイドと交流の場をつくる。
- ③これからの介護に向けて準備したい方のための情報や知識の提供をする。
- ④医療・福祉・NPO・企業などさまざまな領域を超えた交流と横断的ネットワークをつくる。

このコンセプトに基づいて、さまざまなグループが創りあげたのが、今回のプロジェクト、「介護なんでも文化祭」である。

### ○活動内容と成果

会場には、認知症の専門医による個別相談、介護者の交流懇談コーナー、介護のスペシャリストたちによる相談コーナー、企業による介護関連商品のブース出展、介護の疲れを癒すコーナー、ミニデイコーナーなど、介護なんでも文化祭の名の通り、介護に関する様々な人や団体が集まった。介護に関してこれだけ多彩な集まりは、おそらく初めてだろう。

介護の達人コーナーでは、様々な分野で名の知れた15名が席に着き、参加者の声に耳を傾けた。介護者の交流懇談

コーナーも盛り上がり、参加した介護者から「このイベントを通してたくさんのつながりが出来た」との声も聞くことができた。この他にも参加者一人ひとりが貴重な情報やつながりを得ることができたことが終了後のアンケートなどからも実感できた。

会場奥のステージでは若年認知症の方によるミニコンサートが行われた。唄い終えた後、会場の大きな拍手の中の笑顔がとても印象的だった。参加者の中でも生き生きとステージに立たれている姿に感動を覚えた人は少なくない。

また、「いつまでも住み慣れた地域で暮らすためには」というテーマで対談が行われ、認知症ケアを中心に医師、専門家が意見を交わした。

介護は、どうしても孤立になりがちである。しかし、つながりを創ることで介護はとても豊かなものになる。そんなつながりの輪が一段と広がったように感じるイベントだった。

### ○これからの展開

継続することに意義があるというみんなの考えで、今年も昨年と同じ11月3日、文化の日に、同じ場所で第2回の介護なんでも文化祭開催することになった。昨年の参加者の声を参考に内容も見直し、さらに充実したものにしていく予定だ。

基本財源の確保がまだできていないが、知恵を寄せ合いながら解決しようと、すでに18年度の実行委員会が発足している。実行委員の輪も広がってきているが、様々な人たちが企画に参加することで、このイベントはさらに魅力的になり、広がりが出てくるだろう。

また、昨年の参加者から「地元でもこのようなイベントをやりたい!」という声が多く出てきている。できれば地域へ展開していきたいと考えていた事務局にとってうれしい成果だが、それを実現するにはそれなりの支援が必要である。この思いをどう支援していくかは、これからの大きな課題の1つになっている。

この介護なんでも文化祭でのさまざまな「つながり」が、新しい「つながり」を生み出し、介護の文化を大きく変えていくに違いない。

## ■障害者とアーティストとのコラボレーションによる作品の「デザイン化」と「商品化」の推進

### 特定非営利活動法人 クーピーファッションアートグループ

団体名 特定非営利活動法人クーピーファッションアートグループ  
代表 仲本薫  
設立 2002年4月10日  
目的 「障害者はアーティストだ！」の理念の下、芸術を通じた障害者の社会参加、才能発掘・育成・自立支援活動や、多様な業界との幅広い交流やコラボレーションを行い、全ての参加者が受益者となることを目指している。  
所在 沖縄県中頭郡読谷村  
ホームページ <http://www.coupii.npo-jp.net/>



#### ○プロジェクトの目的と概要

「障害者はアーティストだ！」。

これがクーピーファッションアートグループの立脚点である。「障害者はアーティストだ!というメッセージによって、家族や関係者も、それまでなんとなく眺めていた絵を『アーティストの卵』の絵だと考えるようになって、価値観が一変し、すごく積極的に動くようになってくる。そしてみんなどんどん変わっていく」のだそうだ。

「クーピー(Coupii)」とは、フランス語で革命。クーピーは「障害者」という概念を変えてしまおうとしているのだ。

障害者アートを取り扱った運動はこれまでもあったが、内輪だけの活動にとどまることが多かった。クーピーの場合、彼らのアーティスト魂に共感するプロアーティストやデザイナーとのコラボレーションで、障害者アートの概念を変え、楽しい雰囲気の展示会を催したり、作品を商品化したりする活動を目指している。

今回は障害者の「絵画教室」を開き、障害者の才能発掘と育成を行うことからはじめ、そこで生まれた優れた作品をプロアーティストとのコラボレーションによりデザイン性に優れた作品に仕上げ、各業界へ紹介し、「障害者アートデザイン」を取り入れた商品の実現化を図ろうというプロジェクトである。

商品化まで一気に進めるところにクーピーの意欲を感じずるプロジェクトだ。

#### ○活動内容と成果

計画では絵画教室から始める予定だったが、健常者との交流も加えた、もっと楽しいものにする方針に変え、観光施設「体験王国むら咲むら」で毎月1回、クーピーアートフェスタを開催することにした。障害者が描いた絵を基にプロアーティストとボランティア(学生、一般、観光客)が協力して大きなビックアート作品に仕上げるという活動である。

スタートする前は不安もあったが、様々な人たちの協力を得て、毎回、素晴らしい作品が完成した。

アーティストに関しても、ネットや口コミで候補を決めて、メールで趣旨を説明して協力してもらうことにしたが、メールで

のやりとりにもかかわらず、当日は前からの知り合いのように楽しいコラボレーションが実現した。まさにアートのパワーである。

完成したビックアートは、ゆうあいスポーツ大会など、県内各地で開催された公的行事に参加して展示するようになった。また、障害者週間には県庁や県内市役所でビックアートの展示を行った。これによって、障害者アートを広く社会にアピールすることができたが、それを見て企業からの問い合わせもあり、目標だった商品化への動きも実現した。

商品化された場合は、作者である障害者に経済的な還元が出来るようにしていく計画だが、そのためにこれからは事業企画や著作権契約などの専門家も必要である。クーピーのネットワークは、また新しい世界へと広がりそうだ。

#### ○これからの展開

クーピーアートフェスタのような毎月継続実施する活動は初めてだったので、推進体制を整えていくために苦労したが、そのおかげで、参加者やボランティアを集める情報発信の方法や活動を成功させるノウハウがだいぶ蓄積されたといえる。少なくとも課題は見えてきた。

また、今回の活動を新聞やテレビが取り上げくれたこともこれからの活動には大きな力になるだろう。県内外のさまざまな人たちとのネットワークも広がった。こうしたことを活かしながら、さらなる「クーピー」(革命)への動きが加速されそうだ。

商品化に関しても大きな一歩が踏み出された。プロジェクトで完成させた作品を、デザイン業界、アート業界、各企業に紹介していき、「障害者アートデザイン」を取り入れた商品の実現化に取り組むことがこれからの課題である。今回の実績を踏まえて、これからはクールビズ商品「かりゆしウェア」のデザインにも挑戦したいし、商工会が開催するデザインコンテストにも応募したいとメンバーは夢を膨らませている。クーピーが障害者の世界を変えていくのも、そう遠い先ではないかもしれない。

## 2. 活動費一部支援プロジェクト

最終選考に残った20のプロジェクトのうち、公開投票で選ばれた10件以外に対しては、プロジェクト費用の一部助成という形で10万円の支援費が提供されました。資金の関係で、申請プロジェクトとは内容が変わっているものもありますが、関連した活動の概要を紹介します。

いずれも新しい物語づくりに向けての魅力的なプロジェクトですが、詳しくはそれぞれの団体のホームページなどをご覧ください。

### ■散歩駅伝の推進

#### 特定非営利活動法人散歩駅伝（代表 石川清治）：宮城県石巻市

石巻市で活動しているNPO散歩法人は、散歩を駅伝方式で行う散歩駅伝という新スポーツを通して、地域住民の心身の健康保持増進を図り、介護予防を促進すると共に、活力あるまちづくりに取り組もうと2005年7月に発足した団体である。



びかけた。

当日、135人の参加があった。とても好評で、大会の様子は新聞も取り上げてくれた。

しかし、活動を通してさまざまな問題が見えてきた。まずは予想以上に資金がかかることだった。当初、活動を継続していくためにも、また

散歩は日本一参加者の多いスポーツであるにも関わらず、スポーツとしての捉え方は少ない。しかし、ヨチヨチ歩きから90才以上の高齢者まで、家族や近所仲間と一緒に気楽に参加できる生涯スポーツだ。参加者の心身の健康につながることはいうまでもないが、散歩を通して住民の交流もでき、まちの健康にもつながっていく。

2005年11月6日の日曜日を第1回石巻散歩駅伝大会開催の日と決めた。そして準備に取りかかった。実際に散歩している人から話も聞きながらコースや運営ルールなどを決めて、参加の呼びかけを行った。周辺の学校や保育園、幼稚園にも参加を呼

みんなで盛り上げていく意味でも、参加費を負担してもらおう計画だったが、参加者の反対で結局は無料にせざるをえなかった。

活動の対象が幼児から高齢者までと対象者の範囲が広すぎたことも反省点の一つである。また、みんな賛同してくれるのだが、いざ集まって行事を行おうとするとなかなか参加してもらえなかったのも残念だった。

課題は山積みで、今後に関してはまだ検討中だそうだが、とてもいい活動なので継続して行ってほしい。そして散歩駅伝大会が石巻から全国に広がることを期待したい。

### ■「一人で縫える寿衣キットの開発」と「サクシード・ファイルの開発」

#### 寿衣を縫う会（代表 嶋本保子）：兵庫県宝塚市

<http://www.phebel.co.jp/sakura/file/juiclub.html>

寿衣とは、経帷子（きょうかたびら）、つまり死に装束のことである。日本には、死者がでると寿衣（死に装束）を親類や近所の女性が縫い、また歳を重ねた時自らが縫って準備するという風習があった。しかし、いまでは「寿衣」という言葉すら知る人は少ない。



くものだと認識を新たにし、次世代につなげ、また成功の意味もある「サクシード」に名前を変えたという。寿衣を縫う会の思いがとてもよく伝わってくる。

寿衣キットもサクシード・ファイルも、多くの人の協力のおかげで、とてもいいものができあ

った。これまでの地道な活動のおかげで、寿衣という言葉や「寿衣を縫う会」の存在も少しずつ知られるようになってきたが、このふたつのツールを使って、活動はさらに広がっていこう。

今回取り組んだのは、一人で縫える寿衣キットの開発と死後に備えての葬儀や事務処理を書き残しておく「サクシード・ファイル」の作成である。

「サクシード・ファイル」は、当初「エンディング・ファイル」と呼んでいたが、内容を検討していくなかで、「死」はエンディングではなく、遺族や関わってきた多くの人々のなかでは生き続けてい

った。これまでの地道な活動のおかげで、寿衣という言葉や「寿衣を縫う会」の存在も少しずつ知られるようになってきたが、このふたつのツールを使って、活動はさらに広がっていこう。

これからは、「今回開発した寿衣キットを全国的に広めることで、死後の不安の解消に役立っていくとともに、ますます厳しい状況になりつつある高齢社会に安心を届けていきたい」と嶋本さんたちは考えている。

そしていつか、世界に呼びかけて、それぞれの国の寿衣をテーマにした「寿衣サミット」を開催することが夢である。

ぜひ実現してほしい夢である。



## ■市民参加による八幡山の修景活動の取り組み

### 八幡山の景観を良くする会（代表 村西耕爾）：滋賀県近江八幡市

地元近江八幡のシンボルともいえる八幡山の荒廃を止め、住民自らで美しい景観を取り戻そうと、定年退職者たち4人で始めた里山整備活動も、今では飛躍的に仲間が増え、活動も急速に広がっている。里山整備作業はこの1年ですでに21回、参加者も約350人。しかも、月第2回の作業は、今では参加するのが楽しい行事になってきているという。



次世代に美しい里山景観とその保全の仕組みを残したいというのが会の目的だが、それだけではない。この活動そのものを楽しみながら、昔のように、八幡山を老若男女すべての住民の暮らしにつなげていきたいというのが村西さんたちの思いである。さらに、活動への参加者は定年退職者が中心だが、この活動は自分たちの社会的再資源化の意味合いもあり、また予防介護の一面にもなると考えている。まさに自分たちが主役の活動なのである。

活動はどんどんと広がっている。学校を巻き込んだ卒業記念

植樹、親子笥堀り大会や竹細工教室、八幡山ハイキングなど、楽しいプログラムが増えてきている。松茸やカブト虫がたくさんとれる山にするための八幡山宝の山プロジェクトもある。

活動が広がっているのは、他の活動団体との交流が広がったおかげでもある。行政や地元企業との協力関係も深まっている。また、この活動を通じて、「近江里山歩きの会」など、新しい

団体も生まれている。定年退職者の新しい仲間作りの場として、県内他地区の見本になっているという。最近では取材も増えている。

代表の村西さんは、「与えられる福祉に慣れっこになっている社会に、取って自ら行動を起こすことで、行政に世話にならずに元気に過ごすことの重要性を呼びかけていきたい」と語っている。

まちづくりの主役はまさに住民たちであることを、このプログラムはしっかりと教えてくれている。

## ■「医療現場で使う日本語授業」開催プロジェクト

### NPO 法人エスニコ（代表 芦田科子）：北海道札幌市

<http://www.12.plala.or.jp/s25/>

「エスニックにここ」を略して名前にしたNPOエスニコは、外国人医療問題に取り組むと同時に、活発な異文化交流事業を行っている元気なグループだ。お金はないがメンバーには自信がある。これが明るく元気な活動を続ける秘訣だという。



今回のプロジェクトは、外国人が日本語を使い医療施設に一人で行けるように自立性を高めることを目的とする事業である。授業プログラムづくりのため、当初はモデル授業を開催しアンケートをとる予定だったが、助成費の減少のため、関連資料収集と外国人や医療関係者への聞き取り調査によって材料を集めることにした。

時間はかかったが、そのおかげで国による医療文化の違いなどが浮き彫りになり、また外国人側からみた日本の医療機関への具体的な希望や意見を聞くことができた。授業を開催する場として考えている日本語教室の状況が把握できたのも大きな成果だった。

時間はかかったが、そのおかげで国による医療文化の違いなどが浮き彫りになり、また外国人側からみた日本の医療機関への具体的な希望や意見を聞くことができた。授業を開催する場として考えている日本語教室の状況が把握できたのも大きな成果だった。

また、11月に開催した「外国人医療を考えるフォーラム：医療現場におけることばのコミュニケーション」に、日本語教育の関係者にも参加してもらい（8人参加）、協力関係をつくることができた。

こうした取り組みにより、提供型だった当初の計画は、外国人と医療関係者、日本語指導者との共創型に変わってきた。

日本語教室での授業はまだ実現していないが、これからは、エスニコの事務所で小規模に実施しながら、協力者たちと一緒に効果的な授業プログラムとその推進方法を検討していく計画である。その報告書ができたなら、全国に情報発信し、「医療現場で使う日本語授業」の動きを広げていきたい。そして、成果を終着点にせず、コムケアのネットワークを活用して更に豊かな活動にしたいと思っているという。

ぜひコムケアのネットワークを活用して、医療現場で使う日本語教室を全国に広げていってほしい。

## ■友達作りの苦手な発達障害者への「話せる仲間」逆プロポーズ作戦

エルマーの会（代表 佐原いづみ）：山口県岩国市

<http://www.sky.icn-tv.ne.jp/~sahara/>

エルマーの会は発達障害児・者とその家族の会である。最近でこそ少しずつ話題になりだしたが、発達障害への社会の理解はまだ低い。

発達障害を持つ子どもたちは、好みや趣味の偏りが強く、自分の世界に閉じこもりがちである。話す相手も親だけという事例も多い。社会で生活し、自立していくためには、親以外に話せる友達の存在はとても大切だが、友達づくりが難しい。そこで今回取り組んだのが、「話せる仲間」逆プロポーズ作戦である。

発達障害を持つ子どもたちが仲間を受け入れる場をどう見つけるかは、砂浜に落とした指輪を見つけ出すくらい根気がある作業だ。そこで、映画、花見、ピクニック、山登りといった様々な機会を用意し、他の参加者やボランティアと交流の機会を積極的につくっていくことにした。心理カウンセリングを研究している大学院生にもアドバイザーとしての協力をお願いした。



様々な行事を通して多くの気づきがあった。漫然とした触れ合いではなく、1人の子どもに専任の担当者を決めておくと話が出やすくなることや、ボランティアが誰かを目で見分けやすくしておくことの大切さが改めてわかったし、質問の仕方でも答えが変わってくることもわかってきた。行事の回数を重ねるにつれて、発達障害を持つ本人たちからも意見が出るようになったことも大きな成果だった。

活動をさらに広げていくために、発達障害を持つ子どもたちと一緒に、収益の上がる事業を起こし、その収益でこの活動をもっと広げていきたいと代表の佐原さんは考えている。その先には、発達障害を持つ人たちによる、楽しい働きの場づくりが描かれているようだ。

その大きな構想は、すでに佐原さんの頭の中にはできあがっているのかもしれない。

## ■障害者の仕事づくりのための福祉作業所と企業のネットワーク構築

NPO 法人とちぎボランティアネットワーク（代表 山中節子）：栃木県宇都宮市

<http://www.geocities.jp/tvnet1995/>

とちぎボランティアネットワークはNPOの中間支援組織だが、企業やNPOの幅広いネットワークを活用しながら、自主事業も展開している。今回の「福祉作業所と企業のネットワーク構築事業」も、そうした強みを活かしたプロジェクトである。

多くの福祉作業所は、関係者の協力で「仕事」を獲得しているが、「下請けの下請け」で低料金の上、内容が限定されており、障害者が自立する収入には程遠いのが現状である。

そこで、作業所で「できる仕事」と企業の「頼みたい仕事」を調査し、作業所の仕事開発に結びつけ、障害者の経済的自立を支援していくことが目的である。これを通して、福祉業界に欠落している経営発想を導入したいという思いもあった。

当初は、作業所ごとに受注できる仕事を調査したうえで、企業との交渉を進める予定だったが、助成金の減額により、企業からの発注可能な仕事を調べ、各作業所で検討してもらおう方法に切



り替えた。

企業との交渉は予想以上に時間がかかり大変だったが、5社が協力してくれることになった。そこで、そこからの仕事を受注できそうな作業所を調査し打診。企業と作業所の間に入って受注を実現する活動に取り組みだしている。

この活動を通してさまざまな気づきがあった。特に、企業と福祉作業

所の仕事に関する発想の違いは大きく、作業所の意識改革の必要性を痛感させられた。これまでのような受身の姿勢ではなく、「どうしたら仕事をもらえるか?」という姿勢で自らを変えていくことの必要性を改めて実感したという。また、予想以上に障害者支援（または雇用）に関心のある企業が多かったことは、大きな勇気につながったという。

企業と福祉作業所のつながりがもっと育っていけば、仕事に対する考え方もお互いに変わっていくだろう。時間と根気のいる作業だが、今後もぜひ継続してほしい活動である。

## ■多文化子育てネットづくり

**NPO 法人多文化共生センター・東京 21 (代表 王慧瑾) : 東京都荒川区**

<http://www.tabunka.jp/tokyo/>

多文化共生センター・東京21が今回取り組んだプロジェクトは、「多文化子育てネットづくり」。当初は「外国人の子育て支援ネットワーク」と考えていたが、日本人が外国人を支援するのではなく、外国にルーツのある親子も一緒に考え解決していく視点を大切にしようとして名称を変更した。「外国人」ではなく、「外国にルーツのある親子」と表現しているところにも同センターのこだわりが感じられる。

プロジェクトの目標は、「外国にルーツのある親子や、親子に関わる様々な人たちの顔の見える関係を育て、情報を共有していくことで、解決に向けて共に活動していくとともに、提言活動なども行い、多文化子育て外国人親への子育て支援ならここだ、と言われるくらいの全国的なネットワークの足がかりとする」である。ここにも多文化共生センター・東京21の強い思いが込められている。



まず支援者のネットワーク作りを目指して3回の研修会を実施した。これまであまり接点のなかった全国の現場職員やボランティア、研究者など立場の違う人たちが全国から集まり、文字通り顔の見える関係が構築できた。そこで生まれたつながりから新しい活動も生まれ、ネットワークの運営そのものに参加してくれる人も出てきた。メーリングリストも立ち上がり、活発な情報交換や議論が始まった。まだ、保育園や子育て支援センターなど、つながりが弱いところもあるが、多文化子育てネットは着実に動き出した。順調なスタートである。

これまでの活動でおおよその課題の抽出ができたので、これからは解決に取り組む活動を始める予定だ。そして、2007年には2年間の活動の集大成として、大きな規模でのフォーラムを開催し、社会に向けての提言をまとめたいと考えている。

多文化子育ての動きが全国に広がっていくことを期待したい。

## ■コミュニティ通訳者バンクの構築

**NPO 法人女性エンパワーメントセンター福岡 (代表 松崎百合子) : 福岡県福岡市**

[http://www.geocities.jp/empower\\_f/](http://www.geocities.jp/empower_f/)

女性エンパワーメントセンター福岡は女性の経済的、社会的、精神的エンパワーメント(力の回復・発揮)を目指して活動しているNPOだ。アジアの女性に学ぶ外国語クラスの運営やホットラインやシェルターなど、主に移住(外国籍)女性の自立支援を行っている。

移住女性は、言語・情報のハンディや法的地位の不安定さなどからドメスティックバイオレンス(DV)などさまざまな問題に直面するリスクが高い。しかし、移住女性に届く多言語情報サービスはまだ限られているし、言葉の問題などから相談しにくいのが現状である。今回のプロジェクトは、当事者が自分の状況や意思を伝え、また正確な情報を得るためのコミュニケーションを支援するための通訳者バンクを構築することが目的である。

まず、通訳サポート入門セミナーで、移住女性の現状やDVへの関心と理解を深め、通訳者バンクへの参加を呼びかけた。受



講者の中の4~5名が参加してくれた。

11月には移住女性のための暴力ホットラインを開設したが、シェルター事業も含めて、相談者に対する支援活動を充実させることができた。今年にはさらに医療通訳に関する専門セミナーの実施も計画している。

通訳者バンクへの登録者は、現在、15人。資金不足とスタッフ不足のため、広報活動が十分にできておらず、バンクとしての本格的な活動はまだ始まっていないが、時間をかけてしっかりと育てていく計画だ。

中国人女性による園児殺害事件など、移住女性を取り巻く異文化ストレスは深刻であり、本プロジェクトのニーズはますます高まっている。通訳者バンクへの期待も高まっていくだろう。これからの展開に注目したいプロジェクトである。

## ■ NPO と地域福祉事業者との連携による成年後見引受事業の実現

### NPO 法人ユニバーサル・ケア（代表 内藤健三郎）：京都府京都市

<http://www.kyoto-koken.net/>

記憶力や判断力が低下した高齢者などに後見人をつけて、生活支援と権利擁護を図ろうとする成年後見制度は、高齢社会の福祉を支える「車の両輪」として、介護保険制度と同じ2000年4月にスタートした。しかし、その普及は介護保険とは比較にならないほど遅れている。

潜在ニーズの高さにもかかわらず普及しないのは、使いやすく安全な引受の仕組みがないからだ。そうした状況を打破していくためには、複数のNPO法人や団体が後見人の責任や役割を分担する方式を導入し、相互の協働と牽制によって、高齢者に対するきめ細かい見守りと安全で公正な財産管理が廉価で提供できる新たな成年後見事業モデルを確立するべきだとユニバーサル・ケア代表の内藤さんは考えている。それへの第一歩が今回のプロジェクトである。

しかし、一挙に事業計画の実現に取り組むのは難しい。推進体制づくりや資金調達が必要だし、なによりも成年後見制度へ

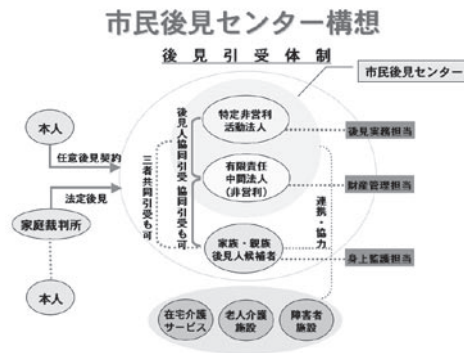
の社会の関心や理解を高めていく必要がある。そこで、まずは成年後見アドバイザー養成講座や市民後見人養成講座を開催し、成年後見普及活動に取り組んだ。

事業モデルに関しては、これまで構想してきたものをベースに、「市民後見センター構想」を発表した。家族・親族で後見人を引き受けている場合も利用できる財産管理の仕組みを組み込む

など、利用者の視点に立った構想である。

こうした動きを京都新聞が大きく取り上げてくれたため、各地からの問い合わせが増えるとともに、社会福祉協議会や金融機関などとの関係も深まった。現在、関係者たちと検討会を重ね、構想を計画へと進めている。実現に向けての準備はほぼできあがった。あとは事業の実施に当たる法人設立の資金が確保だけだ。

内藤さんが目指す「市民後見センター構想」の実現にはそれほど時間はかからないだろう。



## ■ まちを元気にする市民放送局設立準備プロジェクト

### 地域と市民の放送局（代表 山野篤）：東京都多摩市

<http://www.crns.jp/>

人と人との暮らしが今よりもっと強くつながっていけるように、市民活動の情報発信を支援することで、みんなが楽しく気持ちよく暮らせるまちづくりに貢献する。これが「地域と市民の放送局」のミッションだ。そして今回、まちを元気にする市民放送局設立準備プロジェクトを立ち上げた。その最初の事業が商店会と学生のコラボレーション。メンバーが全員、多摩大学の学生であることを活かしたテーマである。

選んだ商店街は大学近くの聖蹟桜ヶ丘商店街。働く人の高齢化が進むとともに、近隣の大型店に押されて、最近にぎわいが少なくなってきている商店街である。しかし、商店街には、単に商品やサービスの売買だけでなく、世間話をしたり、まちの情報を伝え合ったり、助け合ったりする地域のコミュニティとしての機能がある。そこに着目して、学生と商店会が協力し合って、まちの紹介映像を制作していこうというのである。



当初は30分程度の地域紹介番組を制作する予定だったが、人間を中心にしていこうということで、できるだけ多くの商店主に、1分単位で桜ヶ丘の魅力や地域との関わりについて話してもらい、リレー形式に変更した。それら映像をまとめたものを60分程度の番組にまとめていく計画だが、この方法だとすべて完成しなくても随時できたものを編集しながら柔軟に放映できる。現在まだ撮影を始めた段階だが、作品は順次、商店会のホームページや店頭で放映していく予定である。

この活動を通して、学生と商店街のコラボレーションの場も育ってきた。予定は遅れているが、このプロジェクトに取り組んだおかげで、開局に向けての課題が明確になり、展開方針も確認できた。商店会との人間的なつながりも育ってきた。

「地域と市民の放送局」が地域に新しい風を起こしていく日も、そう遠くはないだろう。

### 3. イベント支援

「つながり」と「ふれあい」を目指す、各地でのコムケア仲間へのイベントに対しての支援を行いました。いずれも一過性のものでなく、新しい物語に向けてのプロローグ的な意味合いをもったイベントです。すでにそこからいくつかのプロジェクトも生まれだしています。参加者も企画に参加する「共創」型が多いこともあって、開催日程が遅れているものもありますが、開催されたものを中心に概要を報告します。

また今年度は、コムケアセンターとの共催イベントも行いました。

#### ■弱さをもったままお金を稼げる場づくりとは？

**主催 ゆいの家（群馬県 代表：高石友江）**

**開催日 2005年12月～2006年2月（連続講座）**

不登校や障害をもった人たちが、社会にでた時の働く場をつくりたいという思いでスタートした「ゆいの家」も10年目を迎えた。すぐ作業所をつくるのではなく、講演会やワンデイシェフレストラなど、ともかくいろいろな人たちの居場所づくりにこれまでは取り組んできた。

そうした活動を踏まえて、ゆいの家を、弱さをもったままお金を稼げる場にしていくために、いよいよ動き出すきっかけにしようというのが今回のイベントである。

ゆいの家が考えている「稼ぎ」は、競争原理の中の稼ぎとは違い、稼ぐことでお互い豊かな気持ちになれ、人のつながりが育っていくような稼ぎである。弱さがあっても、それぞれの持ってい



る知恵や力を出せば、そうしたゆいの家らしい働き方、稼ぎ方があるはずだ。これが「弱さを絆にして一緒に生きていこう」をミッションに掲げているゆいのかの考えである。

最初は、どんな反応がでるか不安だったが、講演会を続けていくにつれて、参加者のなかに共通認識が徐々に育ち、お互いの夢を語りあう「ドリカム会」が発足。さらに最終回のワークショップでは、ゆいのかの活動とお互いの夢の実現を結び付ける話し合いが行われた。今までは一部の人が企画運営してきたゆいのかの「みんなのゆいの家」に向かいだしたのだ。

新しい稼ぎの場「ゆいの家」が話題になっていくのもそう遠い先ではないだろう。

#### ■つながる・あったかくなる・はっしんする「pot\*cafe」

**主催 わかものNPO—Voice OF TSUKUBA（茨城県 代表：山浦彬仁）**

<http://vot.seesaa.net/>

**開催日 2005年12月～2006年3月（連続イベント）**

わかものNPO-Voice OF TSUKUBAは、「コミュニティの再構成」と「若者の社会参画の促進」をミッションに掲げている若者たちのNPOである。

今回企画したのは4回の連続イベント。すべて単独ではなく、それぞれにパートナーをつくっての合同企画イベントである。しかも単にイベントが目的ではなく、その準備のための若者たちの交流を重視しており、これまで少なかった他県の団体との「つながり」を深め、相互に「学び」と「刺激」を受けながら、「相互理解・意気投合」で、新しいプロジェクト起こしを目指そうというのである。

プレイベントとして12月につくば市内の団体に呼びかけての、つくば市「まち歩き」とトークイベント「ベデFilm」を開催。約



20名の「わかもの」が参加。

1月に「pot\*cafe」第1弾をつくば市で開催。コミュニティアートふなばしなど、千葉からのゲストを交えて「若者分断の危機!？」をテーマのトークセッション。2月には「市民社会をつくる ボランティアフォーラム TOKYO 2006」に出張 pot\*cafe。「健常者・障害者それぞれが考えるバリアフリー」のトークセッションを行った。3月にはちばNPOユースフォーラムにも参加。この間、「若者分断の危機」をテーマにコムケアサロンも開催した、

こうした若者らしい行動的な展開で、さまざまなつながりを構築し、新たな若者プロジェクトもいくつか起こってきている。これからさらにどんな風が起ころのか楽しみだ。

## ■「遠距離介護をテーマに市民と企業がはじめて出会う」パオッコ公開ミーティング

主催 特定非営利活動法人パオッコ（東京都 代表：太田差恵子）

<http://paokko.org/>

開催日 2006年2月5日

パオッコは2005年12月、ネット上に「離れて暮らす親をケアするために役立つサービス・商品の『クチコミ情報局』」を開設した。開設の前に実際に遠距離介護をしている市民にアンケートを実施したところ、大きな関心や要望をもっていることがわかった。そこで、市民とサービス提供者（企業など）が共に「サービス」について考える公開ミーティングを開催した。

100人を超える参加者があり、企業も9社参加して、関心の高さが伺えた。市民と企業が同じ目線で話し合えたことで、双方から高い評価を受けることができた。マスコミ各社も参加し、後日大きく報道してくれたことも大きな成果だった。

今回は初回ということで、サービス提供事業者には企業を招いた。遠距離介護をスムーズに進めていくためには、地域で活動するNPOやボランティア団体、行政などの連携も必須である。「より住まいやすい社会にするには、それぞれがそれぞれの立場での意見を発し、共感を得て、互いの意見をすりあわせていくことがますます大切になっていくだろう」とパオッコは考えている



ので、これからも、さまざまな団体を招いた公開ミーティングを継続していくことになるだろう。

遠隔地介護の問題は、企業にとっても人事管理上、大きな問題である。パオッコの役割はこれからますます大きくなっていくはずだ。企業とパオッコのコラボレーションはもっともっと広がっていくに違いない。

## ■ Youth Cafe in KOBE ～ユース・カフェ in 神戸～

主催 ユース・ステップ『ユース・カフェ in 神戸』実行委員会（兵庫県 代表：村上桂太郎）

<http://www.cskobe.com>

開催日 2006年3月12日

NPO・NGOで活躍する同年代との若者との交流やふれあいを通して、「興味はあるがきっかけがない」若者たちに、より理解を深めてもらい、市民活動活性化のため若い世代のパワーおよび知識の底上げにつなげたい。これが今回のイベントの目的だった。

各分野で活躍している3人の若者をゲストに招いたパネルトーク、実行委員が参加しているNPOの活動紹介の後、参加者全員がグループに分かれて話し合うトークテーブルなど、気楽な雰囲気のなかで楽しい会になった。

ゲストが同年代だったことで、市民活動を身近に感じた参加者も多かっただろう。すぐに始められるボランティア活動の呼びかけも行われたので、実際に活動に参加する若者もできた。

イベントに向けて、8回の実行委員会を開催し、準備を重ねたが、そのおかげで、神戸・阪神間の若手NPOスタッフのつながりも深まり、イベント開催のノウハウも蓄積できた。今回参加した若者たちも含めた若者ネットワークも形成されたので、今後は、このネットワークを活かして、同趣旨のイベントや小規模なサロン、



または勉強会などを半年に1回のペースで開催していくことになった。

このネットワークがどう広がっていくか、とても楽しみである。ちなみに、ゲストの一人は、今回資金助成先になったトリコロールの清田さんだった。

## ■だれでも気軽に座談会～ちょっとヘン!?今どきの「子育て」環境

主催 子育て学ネットワーク（東京都 代表：深作拓郎）

<http://kosodachigaku.nomaki.jp/index.html>

開催日 2006年3月21日

子育て学ネットワークは、「子育て」ではなく「子育て」にこだわっており、「子どもの育ちを中心に据えた社会の創造」を目指しているグループである。今回はそうした理念を意識しながら、3つのテーマについて、さまざまな立場の人たちが一緒に考えていこうという気軽なフォーラムである。

選ばれたテーマは「給食」「安全対策」「個人情報保護」である。それぞれに最近話題になっている事例を材料にそれぞれの思いをぶつけあう、まさに気楽な話し合いである。参加者は約20人だったが、子どもの保護者、活動現場の職員、研究者、議員といったさまざまな立場から参加があり、4時間という時間にもかかわらず、熱い議論が続く密度の濃いフォーラムになった。

話し合いは3つのセッションにわけて行ったが、それぞれのテーマの中で話が完結することはなく、議論を進めるほどに内容に広がりが出てくるのも刺激的だった。また、今回取り上げた3つのテーマが、底流でつながっている点を確認できたことも成果だった。



参加者からは、今回のような完全にオープンな場での議論が今こそ求められているという指摘もあり、また開催したいという声がでてきた。事務局長の星野さんは、今回の参加者を中心に実行委員会をつくり、新たにテーマを設定してイベントを開催したいと考えている。

こうした動きが全国にどんどん飛び火していったらいい。

## ■みんなで創る「大きな福祉」 - コムケアフォーラム in 九州（福岡）

主催 特定非営利活動法人共生支援センター（福岡県 代表：津田泰夫）

開催日 2006年3月25日

みんなで創る「大きな福祉」をテーマに、九州北部地区のコムケア仲間が企画し開催したのが、第1回コムケアフォーラム in 九州。今回は共生支援センター（事務局長：西川義夫さん）が事務局を担当してくれた。

お互いを気遣って支えあう仕組みを創り上げようと、さまざまな領域で多様な取り組みが知恵を絞りながら続けられているが、そうした多様な事例を紹介しあい、参加した人たちのゆるやかなつながりを育てていく場にしたいというのが今回の目的だった。

そこで実践的な活動に取り組んでいる人たちを中心に参加を呼びかけ、70人を超える参加を得た。

コムケアセンターからも「大きな福祉」について少し説明する時間をもらったが、続いてコムケア熊本、共生支援センター、グリーンコープ生協からの活動報告など、いくつかの事例報告があった。

後半は、参加者全員が円座を組んでの茶話会。全員が活動や思いを熱く語りあった。そして最後は、民族音楽の演奏や西川さんのハーモニカ演奏。あっという間の楽しい4時間半だった。



展示会場では、参加された共同作業所や多文化共生などの団体がそれぞれの展示販売を行ったほか、資料の展示・配布も行われた。

こうしたフォーラムを是非継続したいという参加者の声もあり、第2回目に向けての動きがすでに始まっている。

## ■コムケア関西交流会「この人に会えたから私たちの今がある～伝えたいねんこの気持ち」

主催 おんなの目で大阪の街を創る会（大阪府 代表：小山琴子）

http://www.geocities.jp/e\_machitukuro/

開催日 2006年4月2日

コムケアのキーワードは「つながり」だが、第1回のコムケア関西交流会は「人をキーワードにした団体のとっておき」を話し合うことをテーマにして開催された。「伝えたいねん、この気持ち」という呼びかけに主催者の思いがこもっている。

まず関西地域で活動している6つの団体が、人のつながりを意識しながらそれぞれの活動を紹介、つづいて今回事務局を担当したおんなの目で大阪の街を創る会が、「この人に会えたから私たちの今がある」ことを、「その人」にも参加してもらって少し詳しく紹介。これがとても刺激的だった。市民活動は、人のつながりで育っていくことが多いが、つながりの創り方や活かし方が意外と不得手なNPOも少なくない。

その後、参加者全員が輪になってそれぞれの思いを一言ずつ発言、たくさんの活動と思いが紹介された。実に多彩な内容で、



「分野の異なる発表を聞きながら、世界の広さのようなものを感じた」という声もあった。

市民活動は、とすれば自分たちにテーマに埋没しがちだが、こうした横のつながりの場がもっとたくさんあるといいという声もたくさんきかれた。そして、終了後の懇親会では第2回の交流会の話もでてきた。

コムケアのメーリングリストのメンバーも、今回の交流会のおかげで実際の出会いがたくさんあった。その中から早速、活動に結びついたものもある。さすが大阪である。

この交流会からどんな新しい芽が育っていくか、とても楽しみである。

## ■ NPO と社協★協働ミーティング

主催 特定非営利活動法人市民活動情報センター・ハンズオン！埼玉（埼玉県 代表：西川正）

開催日 2006年5月27日

昨年、「社会福祉協議会とNPO」をテーマにしたコムケアサロンを開催したところ、社協スタッフも多数参加してくれ、関心の高さが感じられた。

それが契機になって今回、市民活動情報センター・ハンズオン！埼玉が「NPOと社協★協働ミーティング」を企画してくれた。ハンズオン！埼玉は、これまで社協とNPOの協働調査プロジェクトに取り組むなど、このテーマには造詣も関心も深いグループだ。

社協もNPOも、一人の「困った」をみんなの「課題」にする『地域福祉』の担い手なのだが、立場が違うためか、うまく協力できていないことがしばしば。しかし、地域のつながりが薄れ、生活課題は多様化し、格差は広がるばかりで、地域福祉がますます困難になるこの時代にこそ、「社協の宝もの」と「NPOのちから」を持ち寄って、何ができるのかを考えることが大切、というのが今回のイベントの目的である。

そこで、地域福祉活動歴50年の阿部守枝さんにお話をさせていただき、地域福祉の原点を改めて確認しながら、参加者みんなで今後の社会福祉協議会の課題や期待を話し合おうということになった。

社会福祉協議会がこれまで培ってきた財産やノウハウを改めて活かしていくための動きがここから出てくることを期待したい。

**NPOと社協★協働ミーティング**


### 社協の宝もの NPOのちから

——地域福祉を取り巻く状況が  
ますます困難になるこの時代に

社協もNPOも、一人の「困った」をみんなの「課題」にする『地域福祉』の担い手です。でも、立場がちがうためか、うまく協力できていないことがしばしば・・・

地域のつながりは薄れ、生活課題は多様化し、格差は広がるばかり——地域福祉がますます困難になるこの時代に、「社協の宝もの」と「NPOのちから」を持ち寄って、何ができるのでしょうか？

地域福祉活動歴50年の大先輩・阿部守枝さんのお話をヒントに、地域福祉の原点を知り、今後の可能性について話し合います。



阿部守枝さん

地域福祉活動歴50年の元祖「熱血」社協マン

宮城県社協職員として、昭和30年代には「民治」による佳民勇退会を実現。昭和40年代は、学校や公民館とともに福祉教育を推進。昭和50年代は、社会福祉法人化の運動を展開。退職後は宮城県共同基金を創設。現在は、仙台・中山地区社協会長、仙台・東通町内会会長として地域活動に奮闘中。

●民治とは・・・地域（市町村）に寄り添い、保健・福祉課題の調査と住民や行政・社協との住民懇談会を開催したもの。

●日時：5月27日（土）午後1時30～4時30分

●場所：川口総合文化センター・リリア11F大会議室（定員50人） JR京浜東北線 川口駅西口正面（裏側）

●内容：第一部：社協の宝もの—地域福祉の原点  
お話し：阿部守枝氏（元宮城県社会福祉協議会職員）  
第二部：社協とNPOの微妙な関係  
社協とNPOの協働調査プロジェクトの調査研究成果を楽しくご報告します。  
第三部：みんなで座談会—今後の課題と期待についてみんなで話し合います。

●参加費：500円（資料代） ※裏面の申込みフォームで事前にお申し込みください。

主 催：NPO法人市民活動情報センター・ハンズオン！埼玉  
協 賛：住友生命社会福祉事業団 興し株式会社  
協 力：コムケアセンター  
後 援：埼玉県社会福祉協議会（予定）  
連絡先：〒330-0063 さいたま市浦和区馬場2-10-6 TEL 048-834-2052 担当：若尾



## ■これからの病院を考える公開フォーラム

**主催 ヒポクラテスの会発足準備会+コムケアセンター（東京都）**

**開催日 2006年5月14日**

病院に関わる活動に取り組むコムケア仲間は少なくない。これまで関係者が集まって何か取り組めないか議論をしたこともあったが、それぞれに忙しくなかなか共創できるまでにはいかなかった。

そこで今回はコムケアセンターが事務局になって、病院に関心を持つコムケアに呼びかけてスタートしたのが、ヒポクラテスの会発足準備会である。

何回かの検討会の結果、病院利用者を対象に、これからの病院のあり方を気楽に話し合う公開フォーラムを開催することになった。病院の実態と医療制度改革の話その分野に詳しい本田宏さん（済世会栗橋病院副院長）からお聞きし、これからの病院について、医療関係者にも参加してもらい、利用者の立場からみんなで考えようという企画である。

医療制度や病院の問題は、私たちの生活にとっても大きく関わっている問題であるにもかかわらず、その専門性のゆえに、どうしても医療関係者や厚生労働省に任せがちである。しかし、もっと利用者としての生活者が関心を持って声を上げていくことが必要だろう。「病院」に対する既成概念も捨てる必要があるかもしれない。

このフォーラムを契機にして、だれでもが参加できる、医療制度や病院のあり方を気楽に考える柔らかなネットワーク組織「ヒポクラテスの会」を発足させる計画だ。

ちなみに、ヒポクラテスとは「医学の父」と呼ばれる古代ギリシアの医師の名前だが、医師の心構えを書いた「ヒポクラテスの誓い」は今でも受け継がれている。

## ■住民流福祉を考える公開フォーラム

**主催 住民流福祉総合研究所+コムケアセンター（東京都）**

**開催日 2006年7～8月（予定）**

「住民流福祉」とは、コムケアの資金助成プログラムの選考委員でもある木原孝久さんが30年以上も前から取り組んでいる福祉発想である。これまでの福祉発想とは全く違って、まさに福祉の対象とされていた人たちが主体になってこそ、本当の福祉だという考えとあっていい。その目指すところは、「住民主体の支え合いのまちづくり」だ。

コムケアも、まさにそうした木原さんの視点と同じところからスタートしたのだが、住民の暮らしの視点から長いこと住民流福祉に取り組んでいる木原さんにとっては、最近のNPO活動はもちろんのこと、コムケアの活動も、まだまだ問題があるようだ。

そこで、コムケアと住民流福祉とが一緒になって、その目指すと

ころや取り組み姿勢などを話し合ってみようということになった。それによって、市民活動やNPOに取り組む人たちに、住民流福祉の本質を理解してもらおうというのが両者の狙いである。

しかし、木原さんの住民流福祉もコムケアもそれぞれに主張があるため、どういふスタイルがいいか議論しているうちに時間が間に合わなくなってしまい、半年延期することになった。

夏には両者が絡み合う公開フォーラムを開催する予定である。きっとそこから新しい物語が始まるはずである。コムケアとしては楽しみ半分、不安半分というところだが、きっとそこから新しい物語が生まれるはずである。

### イベントはコムケア仲間のつながりを育てる場

コムケアでは「つながり」にこだわっていますが、イベントはつながりづくりにはとても大きな威力を発揮します。

まず、企画段階でさまざまな人がつながります。特にコムケアセンターが主催するイベントのほとんどは、コムケア仲間に声をかけて実行委員会を発足させますので、さまざまな活動に取り組んでいる人たちの「共創」が始まります。最初に構想していた内容が、さまざまな人たちの議論によって、大きく変わることも少なくありません。

そうして生まれた新機軸はたくさんあります。

イベント当日もまた、さまざまなつながりが生まれる場です。支援する側と支援される側とを分けないコムケア活動では、イベントの会場設営でも参加者に汗をかいてもらうことが少なくありません。一緒に汗をかけば、つながりは太くなります。

イベントでつながったグループが一緒になって新しいイベントに取り組む動きもでてきました。

イベントは知恵と汗を出し合う場としてはとても大切な場だと思います。

コムケアの6年目は、イベントを中心に活動を展開する予定です。

各地でのコムケアフォーラムも展開していく計画ですが、全国版のコムケアフォーラムも2回、計画しています。

一つは「インキュベーション型コムケアフォーラム」です。すでに実行委員会が発足し、夏の実現に向けて動き出しています。

さらに、これまでの5年間の資金助成プロジェクトのいくつかの現在を発表してもらう成果発表型コムケアフォーラムも計画しています。

## 資料1

### 「つながりこわし」から「つながりづくり」の時代へ

#### ■「つながり」を壊してきた社会

全国のNPOや市民活動をささやかに支援しながら、誰でもが気持ちよく暮らせる社会に向けて、さまざまな活動をつないでいく。これがコムケア活動\*の目指していることです。

この数十年、私たちはさまざまなつながりを壊してきました。

人とのつながり、自然とのつながり、地域社会とのつながり、歴史とのつながり、さまざまなつながりを壊すことで、経済を発展させ、生活の利便性を高めてきたと言えるかも知れません。

たとえば、企業はつながりを切ることで、生産効率を上げ(その象徴が分業です)、労働力を確保し、市場を拡大してきました。行政も効率を高めるために縦割り行政を展開してきました。私たち自身も、近所付き合いのしがらみから自由になるとか、家族のつながりを弱めるとか、お互いの問題に踏み込まないとか、つながり壊しに加担してきたように思います。

その結果、経済は発展し、私たちの生活も便利になりました。

でも何か欠けている、と私たちは気づき始めました。

そればかりではありません。経済も壁にぶつかり、社会もたくさん問題を顕在化し始めました。

そして、みんな気づきだしたのです。「つながり」が大事ではないかと。

最近のNPOや市民活動の広がり背景には、そうした状況があると思います。

#### ■「つながり」は社会の一番大切な資源

人のつながりこそが社会にとっての一番大事な資本(ソーシャルキャピタル)だという認識が広がりだしました。

時代のキーワードが「つながり」になったのです。

そして、これまでばらばらに活動していた人や組織がつながりだしました。関心を同じくする人たちがつながって、NPOをつくりだしました。そのNPOが企業や行政と協働しはじめました。異質な課題に取り組んでいるNPOのつながりも急速に広がりだしています。

しかし、注意しないといけないのは、そうした市民活動もまた、それぞれが自分たちのテーマや世界に埋没してしまいがちなことです。それでは結局、何も変わらないのではないかと、そういう思いがコムケア活動の出発点でした。

ですから私たちはさまざまな問題をつないでいくことによって実現できる「大きな福祉」を理念に掲げました。そして、「つながりづくり」にこだわっているわけです。それも表情のある個人のつながりに。

#### ■個々の問題をつなげていくことで実現する「大きな福祉」

私たちが活動の名称に使っている「コミュニティケア」も、最近ではよく使われるようになりました。私たちは、この言葉に関しても、専門的な定義などにとらわれることなく、誰でもが気持ちよく暮らせる社会に向けてのすべての活動をコミュニティケア活動と呼んでいます。

ケアとか福祉というと、どうしても高齢者介護だったり子育て支援だったり、あるいは難病や障害の問題だったり、個別の問題解決をイメージしがちですが、私たちの生活は、そうしたさまざまな問題が絡み合っ成り立っています。ですから個別問題だけを見ていてもなかなか問題は解決しないように思います。

そこで、私たちは、コミュニティケアという言葉の中心は、やはり「つながり」だと考えました。人のつながりがなければ、どんな立派な制度も施設も十分な効果はあげられないのではないか、と考えているのです。

コムケア活動の仲間、実にさまざまな活動に取り組んでいます。環境問題も文化活動もありますし、平和活動や防災活動もある。コムケアのメーリングリストに登場するテーマはあまりに多様なために、少し整理してほしいという要望があるくらいです。

しかし、私たちはあえて、テーマを絞り込もうとは思っていません。テーマが多様であればあるほど、世界は豊かになり、そこから生まれる物語も魅力的だと思うからです。それに社会における問題はすべて、必ず「つながっている」からです。

## ■世代や障害を超えた交流から生まれる新しい物語

問題をつなぐことは、同時に世代や地域をつなぐことでもあります。

特に重要なのは、世代間交流、世代を超えたつながりです。

たとえば介護問題というとある一定の世代の人しか関心を持たない傾向がありますが、実は介護保険制度をどう育てていくかは、すべての世代の問題ですし、ニートや引きこもりの増加を社会の仕組みに対する問題提起と捉えれば、まさにこの社会をつくってきた大人たちの問題です。

大きな福祉は、世代を超えたつながりの中から生まれてくるはずで、世代を超えた交流が育てば、おのずとそれぞれの新しい役割も見えてきます。そこからきっと、「支援する人」「支援される人」という一方的な関係ではなく、お互いが「支援しあう関係」が生まれてくるはずで、それぞれの違いを認め合いながら、一人ひとりが主役の社会への第一歩は、まずは心を開いたつながりから始まります。

世代だけではありません。さまざまな障害もまた、つながりの大切な要素です。お互いの障害を共有できれば、お互いに支えあう関係が育ち、私たちの生活はもっと気持ちよくなっていくはずで、さまざまな人がいればこそ、社会は豊かになっていきます。

世代や障害を超えたつながり、世代や障害の違いを活かしたつながりから生まれる新しい物語は、きっと楽しい物語になるでしょう。

## ■大きな福祉を目指した、新しい「結い」への道

「つながりこわしの時代」から、「つながりづくりの時代」へ。

そのビジョンに基づいて、コムケア活動は、今年もさまざまな「つながり」を深め、そこから「新しい物語」を育ててきました。

コムケア活動が目指している、大きな福祉を目指した、新しい「結い」への道も、少しずつ見えてきたような気がします。

2005年5月20日

コムケアセンター事務局長佐藤修

## 資料2

### 資金助成プログラム選考経過報告

#### コムケアセンターのホームページでの報告

##### ■ 2005年8月23日

コムケアの資金助成プログラムの募集を締め切りました。今年には146件の応募をいただきました。ありがとうございました。

先週から予備選考に入りました。このプログラムの特徴は、自発的に参加してくれるコムケア仲間が予備選考をしてくれることです。多くの資金助成プログラムは、事務局が予備選考し、有識者の選考委員が最終決定をするのですが、コムケアではできるだけ公開の場で評価していきたいと考えています。

今回は22の方が予備選考委員に立候補してくださいました。グループ分けの関係で、お一人は参加を見合わせてもらったのですが、とてもうれしい反応です。予備選考は、やっていただくとわかりますが、結構大変なのです。しかし、学ぶことはたくさんあります。来年はぜひ皆さんもご参加ください。応募団体に関係なければ誰でも参加可能です。

予備選考は書類選考ですが、9月6日にはコムケアセンターで予備選考会が開催されます。そこで40件が決定されます。そして、次の第2次選考に入ります。ここでは専門家の方が40件のプロジェクトを評価し、9月20日に選考委員会を開催し、最終選考会での発表の候補を決めます。そんな形で、これから選考が進んでいきます。その過程はまたここでご報告していきます。

今回は選考に至る前の感想を書いておきます。もしまたこうしたプログラムにご応募されることがあれば、参考になると思いますので。

コムケアのプログラムの、もう一つの特徴は、申請にあたって内容的なことも含めて相談に応じると言うことです。これは応募要綱に明記されています。そのため、プロジェクトの創り方なども含めて、さまざまな相談がありました。申請書をメールやファックスで送ってきて、内容の確認を依頼してくるところもいくつかありました。もちろん可能な範囲で対応させてもらいました。

中には数回にわたり相談に来てくれ、申請書もできたの

ですが、むしろ自分たちで進めて行くことになり、応募をやめたところもあります。これは私にはとてもうれしいことです。資金助成を受けずにできることもいろいろあるからです。

しかし、その一方で、明らかに募集要項を読んでいないと思われるものもありました。内容を熟読しなくとも、ちょっと目を通すとよくわかります。これでは予備選考も通らないと思ってしまうものもあります。とても残念なことです。

資金助成プログラムはいろいろとありますが、それぞれに「主旨」や「狙い」があります。それをしっかりと踏まえて、それに適合するように書かないと選考委員には受け入れられないでしょう。ただ出せば良い訳ではありません。募集要項をしっかりと読むことは応募の前提条件だと思います。

いつも気になるのは、プロジェクトの名前です。名は体を現すといますが、とても重要です。そこに必ず企画者の思いや構想の熟度が出てまいります。いいプロジェクトは名前に象徴されると思いますが、名前だけでこれは支援したいというものも毎年、数件はあります。名前にはもっとエネルギーを注ぐべきです。子どもたちの命名と同じくらい大切なことだと私は思っています。

また、申請書は各1枚の様式になっているにもかかわらず、数枚にわたって詳しく記入してくる方もいます。もちろんそれがだめだとは書かれていませんが、選考する立場からいえば、あまり気分のいいものではありません。長い申請書は、大体において、自分たちの伝えたいことを羅列していることが多く、読み手の関心事には合わないことが多いのですが、その結果、プロジェクトの内容が逆に伝わりにくくなります。

最高のコミュニケーション言語は「一言」です。

以前、資金助成プログラムの申請書の効果的な書き方というセミナーがありましたが、そこでもあるプログラムの事務局の人が、長々と書いているものは対象から外すと話していました。そこまで行かずとも評価ではマイナスになりかねません。もし詳しく書きたいのであれば、別紙をつけて、その別紙を読みたくなるようなメッセージを申請書に書くのが効果的です。

また手書きの場合は読みやすく、パソコン入力の場合は、文字をできるだけ大きくするのも大切です。そうしたちょっとした気遣いが読み取れば、評価にも影響します。どんないいプロジェクトも、推進する人たちに「ケアマインド」が感じられなければ、期待はできません。

やや大きさに聞こえるかもしれませんが、申請書には、その団体の文化や性格が出てきます。そんなこともぜひ意識して、これから申請書をお書きになるといいと思います。

## ■ 2005年9月8日

9月6日の予備選考会で全応募件数146件の中から41件のプロジェクトが選ばれ、本日から第2次予備選考に入りました。第1次予備選考はご案内の通り、自発的に手をあげて下さった22人の方とコムケアセンターのスタッフが参加しました。

これがコムケアの大きな特徴です。おそらく他のプログラムでは真似をしたくてもできないでしょう。自発的に参加して下さった方々の熱意とご尽力に敬意を払います。予備選考委員のみなさんには、それぞれに30件のプロジェクトを精査してもらいました。これは実は大変なお仕事です。しかし、そこから得るものも大きいと思います。

感想を数名の方からいただいています。またホームページでご紹介しますが、たとえばこんな感想です。

- ・ 人が真剣にやっている活動を評価していくと言うのはとても責任の重いものですよね…じっくり考えていたら遅くなってしまいました。
- ・ 今回の体験は僕にとっての財産になりました。
- ・ 他の団体の選考をさせてもらって、プロジェクトを誰かに伝えることのポイントがわかったような気がします。
- ・ 全国でこんなにさまざまな活動が行われていることを知って元気になりました。

第1次予備選考は、全応募プロジェクトを受理順に5つ

のグループに分け、それぞれに5人ずつが担当して、4段階評価をしました。評価基準は募集要項にある6要素です。事務局長の私は全応募プロジェクトを読ませてもらいました。読み応えがありました。感想はまた書かせてもらいます。

予備選考委員すべての評価結果を集めて、得点の多かった順に予備選考会で内容を確認しながら議論して40件を絞り込みました。予備選考会への参加者は5人でしたが、予備選考委員の皆さんの意見を中心にできるだけ多角的な視点から議論させてもらいました。

上位は比較的簡単に決まりましたが、後半はなかなか決まらず、結局、41件と予定枠を1件だけ超えるプロジェクトを第2次選考に進めることになりました。

予備選考での評価が高かったプロジェクトの中には、これまで支援したプロジェクトと類似のために対象にはならなかったものもありました。これはとても残念なことです。応募される時は、これまででどんなものが選ばれたかを調べ、同じ目的でも切り口やプロジェクト活動の内容を少し工夫されるとまた違った評価が得られると思いました。

ここで選ばれた41件を、専門選考委員にまずは書類で評価してもらうのが第2次予備選考です。今日から4人の選考委員が書類審査に入っています。この書類選考の結果を踏まえて、9月20日に、最終的な予備選考委員会が行われ、最終選考会で発表していただく20件が決まります。結果は22日までにはこのホームページに掲載します。

ちなみに、今回選ばれた41件ですが、まだ敗者復活や見直しがある可能性がありますので、結果についてのご照会には応じられませんが、お許しください。

## ■ 2005年9月22日

コムケアの資金助成プログラムの予備選考が終了しました。公開選考会で発表してもらう20プロジェクトが決定しました。今先方との最終の詰めをしていますので、ホームページでの発表は月曜日になりそうです。

前回、ご報告したとおり、第1次予備選考を通過した41件のプロジェクトを対象に、4人の選考委員を中心に

20日に選考委員会を開催しました。

選考委員は昨年同様、次の4人です。

片岡勝さん（市民バンク代表）

北矢行男さん（多摩大学教授）

木原孝久さん（住民流福祉総合研究所）

町田洋次さん（ソフト化経済センター理事長）

皆さん、それぞれ明確なメッセージをもちながら実績を上げてきた方々です。これだけの皆さんに応援してもらっているのがコムケアの強みの一つです。選考会には資金提供してもらっている住友生命と東レの関係者の方にも参加してもらいました。NPOの実態をぜひ知っていただきたいからです。

また予備選考委員に参加された方も希望者は参加してもらいましたが、日程が悪かったのか残念ながら参加者は2人だけでした。

選考結果は2件だけがさらに内容を確認して決定することになり、その確認を経て、昨日、20件が決まりました。いま、該当する団体に最終確認をさせてもらっています。

個々の選考に関しては報告を省略させていただきますが、全体を通して、選考委員からは次のような意見をもらいました。

- ・ 少し企画を深めるだけでもっといいプロジェクトになると感じたものも多かった。事務局が企画から関わって助成先を決めるべきではないだろうか。
- ・ 事業の広がりがないので申請書に書いていないので何とも読み取りづらい。儲け（収益）をあげる仕組みをつくるためにメンター（コンサルタント）を抱えるべきではないか。20人ほどのコムケアフェローがいると面白い。
- ・ 30万円をどう効果的に使うのかという視点からの評価も重要。今までの同質的量的競争の中でのプロジェクト起こしとは違い、新しいプロジェクトなので難しい面があるが、しっかりと計画して実行することが大切。
- ・ 自分たちで資金を稼いで行く姿勢が全体に弱い。

これはまさにコムケアが考えている方向です。

事前からの相談については、現在も相談があったところには応じていますが、先方から相談がなければ今は対応はしていません。私もアドバイスしたいと思うプロジェクトが

いくつかありましたが、始めると身が持たないので自重しています。メンター制度は考えていますが、まだ組織化できていません。みんな中途半端です。反省しなければいけません。

今回の結果を踏まえて、10月16日に公開選考会が開催されます。

みなさん、どうぞご参加ください。周りの皆さんもぜひお誘いいただければうれしいです。

## 資料3

### 資金助成プログラム最終選考会での事務局長メッセージ要旨

#### 最終公開選考会報告書から抜粋

選考会を始めるに先立ち、これまでの経緯や会の主旨などを少しお話をさせていただきます。

最終選考会ですので、発表する皆さんは、大変なプレッシャーだと思います。しかし、今日、発表される20のプロジェクトは、全国から集まった146件の中から選ばれたプロジェクトです。いずれも、社会に新しい風を吹き込むプロジェクトと言っていいでしょう。

そう考えれば、今日は、社会に新しい風を吹き込む、20のプロジェクトの発表会でもあります。ですから、今日は自分たちのプロジェクトを自慢するような気分で、発表を楽しんでもらえればと思います。

ここに立つと、ちょっと緊張しますが、ここにいるのはみんな同じ思いを持った仲間なのだと思います、気が楽になります。参加者の皆さんも、むしろ新しい市民活動の動きに触れて、「応援する」という姿勢で、発表者にエールを送っていただければと思います。

ご案内の通り、このプログラムは、住友生命社会福祉事業団の支援によって、5年前に始まったプログラムです。資金助成は今年で5回目です。一昨年から東レ株式会社も支援して下さっており、2社の支援を受けて展開しています。両社ともコムケアの主旨に共感してくださり、全面的に応援して下さっています。おそらくこれほど自由にさせていただいているプログラムは他にはないと思います。

市民活動に対する資金助成プログラムはいろいろありますが、このコムケアプログラムは他とは一味ちがっていると私たちは自負しています。それについては、募集要項やホームページなどでメッセージさせていただいていますが、折角の機会ですので、改めて少しお話ししたいと思います。

このプログラムの目的を一言で表現すれば、各地で展開

されている、大きな福祉を目指したコミュニティケア活動をつないでいくということです。

キーワードは3つあります。

まず「大きな福祉」。福祉というと、多くの人は介護や子育てなど、特別の問題をイメージしがちですが、私たちは、「みんなが気持ちよく暮らせる社会づくりに向けての活動」をすべて「大きな福祉」と考えました。

個々の問題を解決していく活動もちろん大切ですが、私たちの生活や社会は様々なものが複雑に絡みあっています。ですから、個々の問題ごとに解決していくと同時に、それらをつなげていくことが必要です。そこで、

あえて活動分野も限定せずに、できるだけ幅広く考え、安心して快適な社会作りに向けての活動を、すべて〔大きな福祉〕として捉えることにしています。

2つ目のキーワードは「コミュニティケア」です。ここに託した意味は二つあります。

まず、コミュニティは「重荷を背負いあった人間のつながり」と考えました。重荷を背負いあう関係。私

たちが最近、忘れてきていることかもしれません。捨ててしまった重荷の中にとっても大事な宝物があったかもしれません。そんな思いもあって、改めて重荷を共有する、人と人のつながりを大事にしていきたいと考えています。

次にケアですが、ケアには、気遣いあいながらお互いに成長していくという意味があります。ケアとは、世話をするだけではなく、世話することで自らが成長する、つまり世話される結果になる、ということを実践者の方々は実感されていると思いますが、ケアは決して一方的な行為ではありません。

従って、コミュニティケアとは、「重荷を分かち合って、お互いに気遣い合いながら、それぞれが出来る範囲で汗と知恵を出しあうこと」ということになります。これを私たちは、コミュニティケア活動、略してコムケア活動と呼んでいます。



3つ目のキーワードは「つなぐ」です。そうした各地の様々なコムケア活動をつないでいく、これがこのプログラムが目指していることです。

大きな福祉といいましたが、福祉関係の活動は、目の前の問題に追われがちで、なかなかよその問題には目を向ける余裕がないのが現実です。そのために、活動が、いわゆる「タコツボ」に陥ってしまい、動きがとれなくなってきたり、唯我独尊的な活動になったりしてしまうこともあります。むしろ自らの問題や活動を社会に開いて、違った活動と触れ合うことが効果的かもしれません。コムケア活動でも、違ったテーマに取り組んでいる団体が一緒になって、新しい物語を創りだしている事例が生まれはじめています。

そうした活動を通して、社会に、「ケアしあう文化」の風を吹きこみ、様々な活動を「大きな福祉に向けて」つないでいきたい。それによって、相互支援の輪をみんなで育てていきたいと考えています。

今日、みなさんに選んでいただく資金助成プログラムはその入り口のプログラムです。具体的には、新しいコムケア活

動を始めようとしている団体に資金を助成していくプログラムです。しかし、資金助成だけがこのプログラムの内容ではありません。このプログラムの特徴は、活動そのものに関する相談にも応じていくところです。それも資金助成の対象になったかどうかとは関係なく、参加して下さった団体には、可能な範囲で相談に乗っていかうと考えています。もちろんコムケアセンターがすべてに

応えることはできません。しかし、参加してくれた団体がお互いに支えあう関係が育てば、誰かが相談に乗っていただけるだろうと考えています。それをつないでいく役割が私たちです。

そのため、応募団体には、自分たちが提供できることも登録してもらっています。つまり、支援する側と支援される側とに分かれるのではなく、相互支援の関係を作っていく。これがこのプログラムの第2の特徴です。そうした関係を育てていくためには、参加団体が相互に情報交換や交流ができる場が必要です。そこで、サロンやメーリングリスト、あるいは各地での交流会などの場を用意しています。

こうした場で、私たちが心がけているのは、今日もそうですが、NPO関係者だけではなく、企業の人、行政の人など、さまざまな立場の人に参加してもらうことです。もち

ろん、障害や世代を超えた交流です。

以上が私たちの基本的な姿勢です。十分できているわけではありませんが、参加して下さった皆さんと一緒に、この考えを具体的な形にしていければと思います。

ところで、肝心の資金助成プログラムですが、今年は6月20日に募集を開始し、8月15日に締め切らせていただきました。応募数は146件でした。地域別には、関東が多かったですが、全国に散らばっています。地方にもコムケア仲間が増えてきています。テーマ別には、なかなか捉えにくくなっていますが、昨年に続いて今年も不登校や引きこもりなどの子どもの問題が多かったのが印象的です。高齢者の問題も相変わらず多かったです。社会はまだまだ悪くなっているという不安があります。しかし、その一方で、在日外国人の生活支援やホームレスの支援など、関心が周りに広がってきていることも印象的でした。昨年も申し上げましたが、応募プロジェクトを通して、社会の問題がいろいろと見えてきます。

さて、こうして集まった146件の中から、どうやって今

回発表する20団体が選ばれたか、です。まず書類による選考を行いました。1件1件がそれぞれの当事者にとってはかけがえもなく大事なものですので、おろそかにはできません。そこで、30人の予備選考委員を決めて、5チームに分けてそれぞれの申請書をじっくりと読ませていただきました。この予備選考には、これまで支援対象になつたり、活動に参加して下さ

つたりした人たちが自発的に参加してくれました。予備選考で絞り込まれた41件を、次に4人の選考委員に評価してもらいました。選考委員は、それぞれがしっかりした立脚点をもった専門家ですので、その評価はかなり分かります。そのかなり違った評価結果を持って、選考委員に集まってもらい、評価会議を開催しました。そして、最終的には事務局で20団体を選ばせてもらいました。これらの過程はホームページでも公開しています。今日はその20件の中から、10件を皆様に選んでいただくとうわけです。

最終選考は公開の場で、応募された方たちにも参加してもらって決めていく、というのも、私たちがこだわっていることです。これについては問題がないわけではなく、批判もあります。しかし、参加した方々の相互支援の輪作りを



#### プログラムの目的

**各地で展開されている  
大きな福祉を目指した  
コミュニティケア活動を  
つないでいく**



目指す以上は、選考過程の透明性を確保していくことが不可欠です。同時に、他の団体の活動を知り合うことがとても有益ではないかと思っています。また、対象になった団体にとっては、情報発信の場にもして欲しいと思っています。

投票には、応募団体のほかに、こうした問題に関心をお持ちの方々にも参加を呼びかけました。できるだけさまざまな目で評価してほしいと思ったからです。登録された投票者は約90人で、その立場はさまざまです。

たった3分の発表で大丈夫かと思われるかもしれませんが、投票に参加していただく条件として、事前に選考資料を読んできてもらっていますので、今日はその仕上げということです。NPOに日頃触れていない方もいるが大丈夫なのかという意見もあるでしょうが、お忙しいなか、こうして集まってくださった方の思いと判断をこそ、私は信じたいと思います。そこから新しい気遣い合いの社会が生まれると確信しています。以上が私たちの思いです。

こんなことも踏まえて、これからの20団体の発表をお聞きいただき、みなさん自身が支援していきたいものに投票していただければと思います。

ところで、これから選考会に入るわけですが、投票は予め登録してくださった方をお願いすることになっています。それ以外の方は、投票には参加せずに、発表をお聞きいただくこととなりますが、発表後の拍手の大きさなどで、ぜひ意思表示していただければと思います。しかし、それだけではちょっと物足りないかと思うので、今年から新しい仕組みを用意させていただきました。これについては、後で説明します。

投票者には、投票用紙を配らせてもらっていますが、どういう視点で評価していただきたいかについては、7つのチェックポイントを上げさせていただいています。詳しくは、選考資料の2頁目に書かれています。これらを参考にして、それぞれの発表をお聞きください。どうしても、今日の3分の発表に大きく影響されるでしょうが、発表の上手下手を超えて、それぞれの団体からのメッセージをしっかりと受け止めて下さい。

投票方法は、一番共感できるものを5つ選んで、○をつけてもらいます。投票用紙には必ず5つだけに○をつけてください。5つでないものは無効票になります。7つのチェックポイントの欄は、必ずしも記入する必要はありません。5つを選ぶ場合のメモにしてください。選ぶのはとても難しいですが、もし自分が資金提供するのであればどこを応援

するかというつもりで考えるといいかもしれません。そして、選ぶことの大変さをぜひ共有してもらえれば、うれしいです。

ところで、さきほどお話したように、今回からもうひとつの仕組みを用意させていただきました。それは参加してくれた人たちにも、共感できるプロジェクトもしくは団体に直接応援のメールを送ってもらう仕組みです。

今回から、この選考会への参加費を出してもらうことにしたのですが、その参加費相当分はそれぞれの思いで、共感できた団体に寄付してもらおうというわけです。詳しくは交流会の時に説明いたしますが、参加費と引き換えにお渡ししたケアアップカードを、後ほど用意される団体のボックスに入れてもらえると、1枚につき1000円がその団体に送られることになります。対象となる団体は今日発表される20団体なのですが、それに加えて私たちのコムケアセンターも寄付ボックスを用意しましたので、この活動そのものに共感してくださった方はコムケアセンターに寄付してください。ちなみに、ケアアップカードは受付で、1枚1000円で購入できますので、もし一口以上を寄付したい方は、追加購入してください。また寄付は資金だけではなく、それに追加して、知恵やノウハウ、あるいは労働時間など、なんでも結構です。このカードが、参加者の皆さんとそれぞれの団体とをつなぐ役割を果たせればとてもうれしいです。

長くなってしまいました。どうぞ、このプログラムの趣旨をご理解いただき、これからの結構大変な2時間を楽しんでいただければと思っています。

ありがとうございました。

## 資料4

### 資金助成プログラム最終選考会の報告

#### コムケアセンターのホームページからの抜粋

##### ■今年の選考会も元気な会になりました

10月16日、コムケア資金助成プログラムの公開選考会が行われました。予備選考を通過した20のプロジェクトが発表され、最終的に資金助成先が決定しました。支援先になったもの、ならなかったもの、いずれも素晴らしいプロジェクトで、本当に紙一重の差でした。

内緒ですが、私が個人的に強く推していたものは残念ながら10には残りませんでした。事務局長には一つくらいは特別枠を設けてほしいものですが、しかしもしそうになったら、今度はきっと選べなくなるでしょうね。ともかくみんな素晴らしいプロジェクトです。これからの展開がとても楽しみです。

今回、選考会に参加してくださったのは約130人。うち、投票に参加してくれたのは88人でした。とてもいい会になったと思います。発表者以外にも、熊本や仙台、大阪など各地から参加してくださいました。

選考会では、まず事務局長の私から、このプログラムの主旨や選考過程の報告をさせてもらいました。その後、予備選考を通過した20団体からそれぞれ3分間の発表がありました。今年はみなさん、発表がとてもうまかったです。その発表を聴いて、投票資格を持つ88人の人が投票してくれました。

いずれのプロジェクトも甲乙つけがたく、投票数は連続的でしたが、上位10位を資金助成先にさせてもらいました。

選考資料を読んでもらうとわかるのですが、今年は障害支援の関係が多かったです。またテーマはますます広がっているような気がします。

投票に参加された方は、選考することの難しさを実感してくれたと思います。本当に迷います。何しろテーマが違いますから、単純な比較はできないのです。

例年のように、参加者からは様々な反響がありました。発表された20チームの方もとても喜んでくださいました。いつも選外になったグループの方からも感謝の言葉をもらえます。事務局としては本当にうれしく思っています。

ところで、今回の選考会は、自発的に参加してくださった運営委員が中心になって進めてくれました。コムケアが目指す「共創」、みんなで汗と知恵を出し合って新しい価値を創りだしていくスタイルです。そのおかげで、いくつかの新しい試みが発現しました。

たとえば、

- ・ 参加費をもらい、それを発表団体などに寄付するケアアップカードの仕組み。
- ・ 交流会にはコムケア仲間のつくったパンやケーキを用意する。
- ・ 昨年支援先になったグループが交流会でパフォーマンスを披露してくれる。
- ・ 交流会終了後のメーリングリストのオフ会。
- ・ 会場設営などは参加者も手伝う。

などです。これに関しては、これから順次紹介させていただきます。

##### ■ケアアップカードによる応援のエールの仕組みをつくりました

コムケア資金助成プログラムの公開選考会の報告の続きです。今回はケアアップカードのことを紹介します。

今年から選考会への参加費として1000円をもらうことになりました。これまでは無料でしたので、集客しにくくなるのではないかという不安もありました。わざわざ選考会に参加するのに参加費までとるのはおかしいという意見も最後までありました。運営委員会で大いぶ議論になったのですが、コムケアは「新しいことへの挑戦」を大切にしています。迷ったら「常識」的ではないほうを選択するのがコムケアなのです。

しかし、ただ参加費をもらうだけでは退屈です。そこで参加費はすべて本人の意思で発表団体に寄付することになりました。しかもそこにコムケアセンターも立候補することにしたのです。寄付の対象に事務局であるコムケアセンターも名乗りを上げる、コムケアならではの破天荒です。コムケアセンターが目指しているのは、支援す

る側、される側の関係ではなく、同じ仲間としてのつながりなのです。その関係を見せたかったのです。

この仕組みを見事に楽しいものに仕上げてくれたのが、ボランティアスタッフの松清智洋さんを中心にした運営委員です。

当日は参加費と引き換えにケアアップカードを1枚もらえます。これが1000円相当の寄付の権利になるのですが、ケアアップカードには対象団体への応援メールを書く欄があり、そこに資金以外で役立てることがあればそれを書いて提供することもできます。資金助成だけではないコムケアの精神に合った仕組みです。当日の運営も松清さんを中心に、同じくボランティアスタッフの阿部さんと近藤さんがすべて仕切ってくれました。

結果として83人が寄付イベントに参加してくれました。助成金とケアアップカードとは必ずしも一致しませんでした。ある団体は、ケアアップカードは残念ながらもらえませんでした。助成金のほうは見事に入選しました。プロジェクト支援か団体支援かの違いが出たのかもしれませんが。

この仕組みにより、参加者は直接発表団体やコムケアセンターに応援のメールと寄付ができるようになったことで、なにか自分も活動に参加した気分になれたと言ってくれた人もいます。

カードをもらった方からも、初対面の何人かと顔の見えるつながりができた、自分たちの活動が市民権を得られたと実感できた、という声が届きました。なかには、「助成金の入選もうれしかったが、何よりうれしかったのはケアアップカードをいただいたことです。心のこもったメッセージは大変励みになります」と書いてきてくれたところもあります。

自分たちのイベントでもぜひ同じようなことを考えたいと言ってきてくれた人もいます。ケアアップカードはさまざまな物語を生み出してくれました。うれしいことです。

このケアアップカードがどう育っていくかがとても楽しみです。

## ■交流会でもコムケアのネットワークが活躍しました。

コムケア資金助成プログラムの公開選考会の報告その3

です。今回は交流会での新機軸を紹介します。

今回の交流会を企画運営してくれたリーダーは、コミュニティアート・ふなばしの下山浩一さんです。発想においても前衛的なアーティストですので、下山さんに任すのはいささかの不安とそれを上回る期待がありましたが、とてもカジュアルな場になったと思います。

まず軽食用のケーキやパンはコムケアの仲間が作っているものを使おうと言うことになり、メーリングリストで呼びかけました。残念ながら立候補がなかったのですが、応援団の大川新人さん(コミュニティビジネス研究センター)の協力で、以前資金助成対象になったこともあるどんぐりパンにケーキをお願いすることになりました。MDネットの山本佳美さんの協力も得て、リトルブレッズ・トゥ・ゴーのパンをお願いすることもできました。また、熊本から参加してくれた明篤館の宮田喜代志さん(コムケア熊本)がご自慢のハチミツを届けてくれました。パンもクッキーも美味しくて評判も良かったです。甘いパン類だけでちょっと困ったと言う人もいましたが、これは反省点の一つです。

もうひとつ新機軸がありました。昨年、助成先になった手がたりの会が、感謝の気持ちのお返しということで、会場で出前マッサージをやってくれたのです。盲ろう者の星野さんが1時間、希望者のマッサージをしてくれたのです。手がたりの会はいま企業などへの出前マッサージをしながら自分たちのショップを実現しようがんばっています。ホームページをぜひ読んでください。応援してもらえるとうれしいです。

例年はここで投票結果の発表があるのですが、今年はやめました。せっかく選ばれて発表しに来たのに、そこで入選と選外のグループに分かれるのは当事者にとっては厳しすぎると昨年までの発表体験者から指摘されたからです。事務局としては気がつきませんでした。いわれてみるとその通りです。

その代わりに、今回はケアアップカードの結果発表を行いました。今回、最高得点は東尋坊で自殺防止に活動をしている「心に響く文集・編集局」でした。代表の茂さんがとてもうれしいスピーチをしてくれましたが、これは改めて紹介

します。

こんな感じで、コムケアのつながりが、交流会を盛り上げてくれました。

交流会には支援元である住友生命社会福祉事業団や住友生命の関係者の方もずっと付き合ってくださいました。選考委員の町田洋次さんも来てくれました。みんな全く同じ立場での参加です。これもとてもうれしいことです。

こうして交流会ディレクター下山浩一さんのおかげで、今年の交流会はとても元気な会になりました。昨年はちょっとした事件で、私が進行役をする羽目になりましたが、今年はおかげさまで参加者の皆さんとたくさんお話ができました。運営委員のみなさんに感謝しています。

## ■自分たちに投票しなかった発表団体が出現しました。

コムケア資金助成プログラムの公開選考会の報告その4です。今回は投票にまつわるコムケア的な話を紹介します。

話の主役は、発表団体に選ばれた一つ、「地域と市民の放送局」です。

多摩大学の学生たちが「市民活動の情報発信を支援することで、みんなが楽しく気持ちよく暮らせるまちづくりの貢献しよう」という思いで立ち上げたグループです。今回はそうした市民放送局を立ち上げる準備プロジェクトとして、商店会と学生のコラボレーション事業を申請してきたのです。とても面白いプロジェクトだと思いました。

しかし、残念ながら選考会では上位10位には入りませんでした。ところが私が予想もしていなかったことがわかったのです。本来は公開すべきことではないかもしれませんが、コムケアですから許してもらえましょう。

ご案内の通り、発表団体は1票の投票権を持ち、5つの団体に投票できます。普通はその1票は自分のところに投じます。これまで例外はありませんでした。

ところが、今回、初めて例外が生まれたのです。このグループは自分たちには投じなかったのです。なぜそうなのか、事務局として最初は彼らが勘違いしたのではないかと思いました。そして念のため、確認させてもらったのです。

勘違いではありませんでした。参加していた中心メンバー3人が話し合った結果、自分たちよりもむしろ支援したいグループがある、そちらに1票入れようということになったのです。どんな議論があったのでしょうか。一度じっくりと話を聴きたいと思いますが、とにかく3人の合意なのだそうです。そして、他の発表団体の活動を情報発信の側面から応

援していこうということになったそうです。感激しました。

このグループはある程度の撮影機材をもっていますし、技術もあります。放映メディアも開発中です。コムケアにとってはとても心強い味方です。

実はこうした活動に取り組むグループはこれまでも支援先になったことはありますが、自らの活動が忙しく、なかなかコムケア活動に参加してもらう余裕が出てこなかったのです。それがこのグループは選考会の段階で、支援を表明してくれたわけです。事務局長としては感激しないわけにはいきません。これからどんな展開になっていくか、とても楽しみです。

資金助成プログラムでこんなことが起こるとは思ってもいませんでした。そういえば、第2回目の選考会でリハーサルを実施したのですが、そこでライバル同士のグループがお互いに積極的なアドバイスをしあっていたことがあります。あの時も感激しましたが、今回もとても不思議な気分になりました。

地域と市民の放送局のこれからの発展に何とか役立ちたいと思っています。皆さんもぜひ応援してやってください。

## ■選考会開催の裏話：資金がなくてもイベントは開けるかもしれません。

公開選考会の報告を続けます。今回は、選考会がどのようにして企画運営されたかです。

普通は事務局が企画運営するわけですが、コムケアの選考会はそうではありません。今回はメーリングリストなどで運営委員会を公募しました。なかにはコムケアセンターを訪問したら、そのまま運営委員会にさせられてしまったという人もいますが、とにかく自発的に一緒にやろうという人たちが集まってくれたのです。当日は自分たちのイベントがあるので参加できないがという人まで参加してくれました。コムケアの仲間は不思議な人が多いです。

この運営委員会を巻き込みながら実現に向けてしっかりした事務局の役割を果たしてくれたのがコムケアセンターの橋本さんです。グループホームで働きながら、週2回、本郷で選考会の準備に当たってくれました。

コムケアは、最近は専任のスタッフはいないのです。私も週2回が当番日です。ほかに斎藤さんと宮部さんがいますが、それぞれに仕事があるため、今回の選考会の企画は橋本さんと運営委員会が中心になって進めました。そこで議論から、これまで報告してきた新機軸が生まれてきた

わけです。事務局だけでやっていたら、きっとこんな元気な会にはならなかったでしょう。

ところで、今回の選考会の費用はどのくらいだったでしょうか。発表者の交通費を別にすれば20万円弱です。半分が交流会の費用です。当日のスタッフはこれもみんな自発的に参加してくれたボランティアスタッフです。人数が多くなりすぎて、今回も少しお断りしたほどです。

実はコムケアの第1回の選考会の時の予算はこの10倍以上かかりました。報告書を作成したり、運営を外部のチームに頼んだり、選考委員の皆さんにも謝礼を出したり、案内をたくさん出しすぎたり、会場費が高かったり、いろいろありました。

そうした体験を重ねて、今回は20万円で実現できたのですが、その気になれば、あまり内容を変えずに10万円までは持っていけるかもしれません。そのためには、これまで以上に多くの運営委員が必要かもしれませんが。

大切なのは、みんなで一緒にやる意味を参加してくれた人たちが持てるかどうかです。それが明確になってくれば、費用は限りなくゼロに近づけるでしょう。

今回、参加費をもらうことにしましたが、これを運営費に当てれば、採算が取れるかもしれません。今回のケアアップカードを、コムケアの仲間のイベントで共通に使える「地域通貨」にすることも考えられます。これができれば、経済的なことよりもっと大きな効用があるはずですよ。

今回の選考会は、こうした可能性があることを確信させてくれました。次回は資金なしでのイベントを目指せないと考えています。コムケアは、いつも新しいことに取り組むことをモットーにしているのです。

皆さんもぜひ運営委員になってください。誰でも歓迎です。

## ■選考委員のみなさんからのコメント。

公開選考会の報告の最終回です。

選考会には予備選考委員の方も数名参加してくれましたが、選考委員の町田洋次さん(ソフト化経済センター理事長)が参加してくれました。

コムケアは、選考委員も一般参加者もすべて同じ関係で対応させてもらいますので、最終投票には町田さんもみんなと同じ1票を投じてくれました。しかも、選考委員席もなかったの、みんなと一緒に席で発表を聴いてくれました。これもコムケアの特徴なのです。その町田さんが、終了後、

こんなメールをくれました。

昨日の選考会は、予想していたものより、ずっとよいものでした。実際話を聞き、懇談会で話すと、印象は変わりますね。20のうち、11～12は、アドボカシー事業でした。ああ、日本でもアメリカのようにアドボカシーが本格的に出てきたんだ、そういう時代に入ったんだというのが新鮮で、NPO活動は進化してるんだというのが実感です。コムケアの「結ぶ」は、事業型を結ぶのではなく、アドボカシー型を結ぶのか、なるほどと思いました。

詳しくは町田さんがブログに書いてくださっていますので、ぜひお読みください。

<http://ameblo.jp/yymachida/entry-10005249041.html>

ちなみにこのブログは、「町田洋次の社会起業家・エッセンス」というのですが、とても示唆に富むブログです。社会起業家や事業型NPOに関心のある方にはお勧めです。

社会起業家でもあるコムケアの仲間の田辺大さん(予備選考委員)もこんなメールをくれました。

NPO法人心に響く文集・編集局さんが、交流会でケアアップカードの支持が集まった事に応じて、マイクで会場に「市民権を得られました」と話された事はキーワードと感じました。コムケアが支援する領域は、信金や地銀も含めて、銀行がサポートできない、事業が生まれたばかりの、初期段階です。その場合、助成金申請が一般的ですが、まだ新しく、実績が乏しい団体の場合、苦戦します。でも、そのような領域に、コムケアは支援で挑戦している。芽生えを大事に育てていく事の社会的意義は大変に大きいと思います。

お2人からのメッセージは私にはとてもうれしいものでした。こうした人たちの支えで、今年の選考会もとても元気な集まりになりました。

参加して下さった方に感謝しています。

## 資料5

### 資金助成プログラム選考委員のコメント

#### 1. 選考委員の感想

##### ■木原孝久（住民流福祉総合研究所所長）

今回私自身の当初の評価では、Sはゼロ、Aが3件程度、Bが10数件というところでした。そちらの指示に従って、Bの多くを格上げして、Aを10件、創り出しました。ちょっと厳しい評価の仕方かなとも思いますが、狙いが良いだけに、それをもっとおもしろい企画に作り出せなかったものかと、そこが残念に思っ、評価を下げたというケースが多かったように思います。

そこで思ったのは、既に企画が出来上がった段階では、どう対処することも出来ないの、例えば（申請があれば）彼らが事業企画をしようという段階で、出向いて、直接、企画会議に顔を出して、魅力ある企画に仕上げる手伝いをするという方法もあるような気がするのです。企画会議へ出前のサービスです。

その企画会議に参加する中で、「これは面白い活動になるぞ」と思うものに「目をつけて」助成対象（候補）に加えていくというわけです。企画会議に参加して、一定時間議論をすれば、ものになりそうな活動かそうでない活動かは、おのずと見えてくると思います。そこでこそ最高の選考ができるのではないのでしょうか。短期間ではできませんから、それぞれ1年ぐらいをかけて、じっくりと助成対象（その候補）を探し出し、これからやろうとする事業について聞き出し、その企画に参画し、いろいろアドバイスしていくのがベストでしょう。

それがむしろコムケアのメイン事業とし、助成に関わる手続きやイベントは、副産物である、ぐらいに考えたらどうかと思うのです。それを自分でやれるかといわれると疑問符がつきますが、できる方法を考える余地はまだあるような気がします。

長い間、選考という役割を演じてきましたが、いまだに、どの活動グループが、「資金助成の価値があるか」あるいは「資金助成も必要か」ということが、申請用紙をいくら見てもわからないのです。仕方がないから、選考委員は各自、申請用紙を読んだ上で、その限られた文字の中から、もっとも

らしい推薦理由を見つけ出して発表しているのですが、そういう委員の発表を聞いていて内心、「ずいぶん確信をもって言っているな」と不信の目で見てしまいます。

一枚の申請用紙だけでなく、もっと判断の元になれそうな、申請グループに関する「なま情報」がもっとあったらと思います。その点で、大変ではありますが、前掲のように、実際にグループの企画会議に参加して、その活動の意義や助成の価値ありやなしやを、じかに判断できるといいのですが。

##### ■町田洋次（ソフト化経済センター理事長）

今年の春から夏にかけて、わけあってアメリカの社会起業家のことをずいぶん調べました。それで痛感したのが、彼らの組織拡大意欲のすごさです。社会起業家は、社会問題の解決策のアイデアを思いつき、それをビジネスの手法で仕組みを設計し、試行錯誤の実験のあと、本格的な事業化に着手します。

問題はここからです。彼らのやったことは、社会によい影響を与えますが、それを「ソーシャル・インパクト」といい、一刻も速くインパクトを広げることを狙います。ベンチャーは、一刻も早く上場し、投資家に儲けをもたらすのがプレッシャーになりますが、同様に、一刻も速くインパクトを広げることが社会起業家に働くストレスです。社会には、問題解決を待っている人がたくさんいるので、それを考えれば、当たり前前のストレスです。そのために組織開発が大切なこととなりますが、ここまで来ると、支援者がたくさん現れ不思議なことに、組織拡大は実現してしまいます。

日本には、この気持ちが欠けてます。こじんまりとまとまるのでよいという風潮があります。それは惜しいことで、社会を大胆に変えることを目指して欲しいのです。その辺りが、今回審査して不満に思ったことです。

##### ■片岡勝（市民バンク代表）

選考のために応募者からの提案を見させていただくのは、毎年の楽しみだ。そこには時代の新たなニーズがたくさん、詰まっている。治安の悪化、外国人との融合、自殺の多発、少子化への対応など、様々な問題を行政に依存することなく、自分たちで解決しようと言う自立市民の姿が浮かび上

がる。彼らが目指すその道は決して簡単ではないが、その後姿には輝きがある。その輝きが共感を生み、協働の輪を地域に広げていく。

そのシーズたちと選考委員として向き合い、私が推すのは荒削りで、エネルギーを感じる提案だ。どこかで見たり聞いたことのない「新しさ」を持っているものたちだ。時代を写すこれらの応募は将来、問題解決セクターとして崩れつつある行政セクターに取って代わることになるのだろう。そんな市民セクターが次代の日本社会のカタチになっていくのだろう。市民セクター育成をコムケアに担ってもらいたい。

### ■北矢行男（多摩大学教授）

今年、審査に携わって感じたのは、応募された個々の活動・プロジェクトが小粒で平凡だったことだ。もっとも助成金が30万円と小粒になったため、応募も自ずとそうなったのかもしれない。お金の使い方も、講師料、会場費、交通費など、当たり前目の費目中心である。

こうなると、支援の仕方を抜本的に考え直す必要があるだろう。NPOの申請する活動への助成よりも、各NPOが自前で自らの戦略を構築できるようサポートするのである。

例えば、実践的戦略構築技法「シンプルストラテジー」の様な考える技術を研修し、自前で持続的に稼ぐ経営者に脱皮してもらうお手伝いをするのである。助成事業より、研修事業の方が、30万円の使い道として、コストパフォーマンスが良いのではあるまいか。

## 2. 予備選考委員感想

### ■麻野信子（NPO法人さわやか徳島）

この度は良い機会を下さり勉強になりました。新しいNPO活動の中で医療・保健も福祉の分野として、福祉をグローバルにとらえた助成資金への企画に感動致しました。

どの企画も活動を楽しみ、仲間の生きがい活動と愛する町づくりに、熱い情熱を感じます。これからの社会には、ますますネットワークと情報が重要になると思います。そして、その中で活動自体は細分化されていき小さいネットワークの

中で助け合いを必要としてきます。そのためにも今回、できるだけ実践した企画を選択させて頂きましたが、どの企画も素晴らしく私たち団体の今後に向けての勉強になりました。感謝申し上げます。

### ■加藤木桜子（特定非営利活動法人ゆうゆう）

かなり厳しい目で見たとつもりだったが、どれも興味深い内容で、絞り込むのが難しかった。特に、行政の支援を得られにくい分野、緊急性を要する分野も多く、評価が難しいと思った。そのため、ここで助成をすることで、その後先々まで続いていくかどうか、という視点を重視しながら評価を試みた。

今回、いろいろな団体の活動内容を読んで、しみじみ思ったのは、「教育的な見方と福祉的な見方の違い」ということだった。福祉の視点で行っている活動でも、「啓発」「社会教育」という視点で行っている活動も、やりたいこと・やってきたことは共通する部分があるのに、切り口が違うと感じた。それは、今までもなんとなく感じていたところだが、今回改めて感じる場所だった。それらの活動が、良い形で連携できるようにするといいいだろうな、と思った。

### ■小山美代（社会福祉士）

私の担当した提案は、30テーマ。大きくわけて、まちづくり、障害者とアート、路上生活者等の社会的弱者の支援など。まちづくりについては、「あたたかな物語」を感じさせ、まちの再生、伝統的な文化の復興などまちを見直そうとするなごれを感じました。なかでも、高齢者の取材活動を通しての世代間交流をめざしたものは素晴らしい取り組みだと思います。高齢者の話しに耳を傾け、主人公となる場を設定することは、高齢者の尊厳のある暮らしの実現につながるものです。

障害者とアートやおしゃれの提案が3テーマ。アートのプロと障害者のコラボレーションは、きっと互いの可能性への再発見をもたらすでしょう。その成果を、どんどん社会に発信してほしいものです。

社会的弱者の居場所づくりの提案は、DV被害者やひきこもり、お年よりなど、「いつでも、誰でもいらっしやい」と多様

な人々を排除せず受け入れるというものです。単一ではなく、多様性のある場づくりが必要とされています。

路上生活者への提案が、年を重ねるごとに増えています。社会が路上生活者に関心をもち、「してあげる」から「本人の能力を引き出す支援」が求められています。

また、本年度の内容に調査（たとえば、住民の意識調査）が増えていました。従来、多くのNPO法人は情熱が先行していましたが、行政や社会に問題解決を訴えるとき、客観的データなど根拠となる資料が重要になります。コムケアの仲間も、この分野に進出して力を発揮することを願っています。

年々、内容も充実し、審査する私も感心したり、感動したり…。様々な人々や組織を「つなぐ」、「結ぶ」ことにより、小さな力が結集して、大きな福祉、みんなが幸せを感じるまちづくりが実現するのだと思います。

### ■斎藤正俊（コムケアセンター）

それぞれ志を持って取り組まれている事業を選考できるほどの立場ではないと承知しつつ、私の知り得る範囲で評価させて頂きました。特に重視した点は事業の発展性であり、言い換えれば社会性と革新性と経済性です。ただし、経済性は社会性と革新性が高ければ工夫次第で高めることは可能だと思うので、そこで、社会性と革新性の2点に着目して評価させて頂きました。結果として、社会性はコムケアの理念や今年の重点テーマに関連するため、ほとんどの事業が少なからず伴っている印象を受けましたが、一方、革新性は全体的に乏しかったように思います。将来性のある事業は競合団体が少なからず存在すると思うので、このような状況下では、社会性がどれほど高くても、独自性、言い換えれば革新性がなければ事業を発展させていくことは難しいと思います。ですから、事業の革新性についてもっと重視することが大切ではないかと思いました。

### ■佐藤祐子（我孫子市ボランティア・市民活動サポートセンター）

この度、私の所属する会もささやかな基金を作りました。いざ、助成金を出すとすると審査方法など問われ、戸惑い大変でした。それで、学ばせていただくよう予備選考委員に応募しました。いざ30件の選考となると、評価基準や目安などあるものの、各々の内容があまりにも違い、思いや規模・ニーズなど2枚のペーパーのみを手がかりにするには、とても難しいことでした。また、書き方次第で理解や伝わり方が違い、難航しました。申請者にとっては、「助成金獲得策略

講座」など、あると嬉しいですね。

そこで、ホームページなども読ませていただきましたが、ホームページに辿りつけなかった団体など、とても残念に思いました。どれも割り切れず幾度となく読み返しました。

本当にその活動の活力となるスパイスになり得るのか、その先に見えてくるものは何か、改めて考えさせられました。それとも、もっと軽い乗りでいいのかな…とも。

最終的には、この判断で良かったのだろうか…。との思いでタイムリミットを迎え、己の判断力のなさに申し訳ない気持ちになりました。

今まで、見知らぬ皆さんの活動が、この機会を通じて、本当に身近に感じられました。そして、全国さまざまな形で熱心な思いで活動をされていることに、たくさんの"元気!!"をもらいました。「一度、訪ねてみたいです。」の思いにも駆られました。

皆さんの活動に、心からエールを送りたいです。

このような機会をいただき、本当にありがとうございました。

### ■須田正子（よりあい\*ええげえし）

初めての予備選考をおそるおそるお引き受けしました。

申請書の内容を読み解くことができるか、そこに込められた様々な思いをちゃんと受け止めることができるか、等々、不安がよぎりましたが、いざ申請書を読み進めると、思った以上に難しいものでした。

どの申請書にも熱い思いが詰まっていた迷うばかりでしたが、コムケアの評価基準を判断材料にして、自分なりの点数表を埋めていきました。

そして何度か読み返しているうちに、第一印象とは違った面が見えてきたり、自分だったらどうするだろうと考えさせられたり。

又、ノウハウやアイデアは今後の参考になりましたし、応募のプロジェクトから、未来の姿が見えるもの、終わったあとの広がりを感じられるものに興味を覚え、自分の関心のありように気づくこととなりました。

結局は、自分自身を問い直し、自分が求めているものを再確認した予備選考でした。貴重な経験をありがとうございました。

### ■橋本克己（特定非営利活動法人彩星学舎）

先日親戚の中学校の運動会に行く機会がありました。栃木の県南地区、ベッタウンが高齢化し、少子化が顕著に表



れている地区です。運動会の入口でテント販売をしている団体があり、焼きそばや赤飯、飲物や和菓子等お手頃な価格で販売していました。その団体は障害児・者の社会参加を進めているNPO法人でした。こんな身近な所で活動を行なっている事の驚きと喜びで一品多く購入してしまいました。地域と交流する機会を上手く利用している点に興味を持ちましたが、制約がありPR活動は行なっていませんでした。

NPOが全国的に増加傾向と言っても各都道府県・地域によっても状況は違うようです。あの申請書に書かれていない様々な想い、背景の存在を改めて実感しました。他者へ伝えていく努力は必要だと思っていますが、表面的な部分だけではなくより本質を探っていく視点も必要だと思いました。色々な事が学べる機会として今後も参加したいと思っております。

### ■橋本典之（コムケアセンター）

スタッフとして関わらせて頂いてから今回で3度目の予備選考となりました。今回も以下の評価基準を重視し評価させて頂きました。＜①社会性：本プログラムで定義する「大きな福祉」の理念に沿っていること②先進性：これまでなかったような新しい要素が含まれていること③発展性：一過性のもではなく、継続的であり発展が期待されること④汗のかき具合：お金で解決しようとしていないこと⑤支援の必要性：支援することが実現の不可欠な要素であること⑥今年度の重点テーマからの評価：テーマの要素が含まれていること。＞それぞれの視点から感想を述べさせていただきます。

①社会性は、3年前に比べ確実に増えています。それはテーマ分析がはっきりとできないことに現れています。つまり、障がい者支援のみ、高齢者支援のみという活動が減ってきたということです。

②先進性は、テーマについてもプロジェクト内容についても今までにないようなものがいくつかありました。ただ、数字で表すとそれほど多くはありませんでした。

③発展性は、申請書から読み取れないところが多くありました。実際にお会いして話をすれば、継続性や発展性が出てくるのですが、申請書上では目先のことしかなくマイナス評価になるところが多かったです。

④汗のかき具合⑤支援の必要性は、申請書だけではなかなか伝わりづらいものです。ただ当事者団体や当事者と一緒になってやる活動が増えています。選考に残っていくのもそういった現場が見えるプロジェクトでした。

⑥重点テーマからの要素は、今年度から新しく加わった

基準です。このテーマが入ることで介護・医療に関するプロジェクトが殺到するかと思いましたが、そうではありませんでした。介護は介護保険制度の導入で助成金をもらうという方向に向かなくなっているのかもしれませんが、今回の重点テーマは介護保険サービスというよりも、もっと身近な暮らしの中の視点を強調していました。介護・医療以外では暮らしの中のつながりが多く含まれていましたが、介護・医療に少なかったのが残念だったと思います。

毎年のように感想に書いている気がしますが、申請書の書き方というのはとても大切です。たとえどんなに素晴らしい活動をしていてもそれが伝わらなければ意味がありません。コムケアセンターでは申請に関する相談にも乗っています。申請書を出す前にもう一度見直して頂けたらと思います。

### ■松清智洋（名戸ヶ谷ビオトープを育てる会）

予備選考に参加して、さまざまな市民活動の裾野の広がりを感じていると共に、自分自身の活動を今一度客観的に見直す必要があると感じました。社会性の高い活動は、どれだけ多くの共感を得ることができるかが、その事業を評価する上で重要なバロメータとなります。もちろんそれが絶対的な評価ではありませんが、その事業の今後の展開を考える上では重要なポイントになります。共感を得るためにはその事業がより社会的に意義のあるものであることはもちろんのこと、PRする技術も少なからず必要になります。もちろんあまりテクニックに走っても、うわべだけのつまらないモノになってしまいますが、逆に個人的な思い入れ、気持ちだけでも難しいと思います。

選考する側の立場に立つと、どうしてもそのような部分が目についてしまいます。惜しいと思う多くの事業は、その事業プログラムそのものもそうですが、申請書の内容がどれだけ多くの人の目を通っているか？という点で疑問があることです。事業そのものについてはその人（たち）の強い思い入れがあるし、第三者的な立場の否定的な意見には反発もあるかもしれません。それらすべてを受け入れろとは言いませんが、それはその事業のある面での限界であることも認識すべきです。申請書についても同様です。少なくとも第三者の評価を受けるための書類は事前により多くの人の目を通ったものの方がよいと思います。より練った文章は読み手にそれが伝わるものです。

コムケアの助成プログラムは助成金そのものが実は重要ではなく、このプログラムによって、多くのさまざまな人の結びつきを築き上げていくことが目的であることを佐藤修氏は

常々強調されているが、そういう意味では、選考に際してはその事業のもっと本質的な部分を評価し、将来性を見極めることを選考側に求めていると思います。実はそれが非常に難しく、そのために予備選考により多くの人の目を通すシステムになっているものと思いますが、多くの目で評価すればするほど、助成の目的をきちんと咀嚼しているとは思えない、最低限の表現力を伴っていない申請書は、その活動団体の事業遂行力を疑うことにもなり、高い評価を得ることは難しいと思いました。

### ■宮田喜代志（明篤館）

はじめて予備審査に参加させていただきました。助成金の趣旨に加えて、私自身いくつかのNPO法人の運営や設立に関わってきた経験から、次のような点に分けて判断してみました。

まず事業理念の社会性とその緊急性、次に事業としての計画性と実現出来そうな「迫力」、そして私の主観的なことなのですが「これは一緒にやりたいな」と思えるかどうか…の3つです。

とくに理念はそれぞれにあると思います。しかし、それは他の人に伝わってこそそのもの。私一人がいきんでもしかたがない、産みの苦しみこそ多くの人と分かつべきだった、ということが最近ようやく解ってきたのです。「困難は分割すべし」（ルロイ神父；井上ひさし）です。

そんなことなどあらためて初めの一步の緊張と熱くなる目頭を思い返す貴重な機会となりました。ありがとうございました。

### ■横尾徹也（UDくまもと補助犬サポーター）

昨年に引き続き、予備選考を担当させていただきました。申請書を読ませていただくと、申請者の皆さまが地域をより良くするために、知恵を絞り、多種多様な活動を行われていることが感じられ、たいへんに勇気づけられました。

「大きな福祉」の実現に必要な不可欠なポイントのひとつが、「相手の立場に立って考える」ことだと考えています。今回の申請者の方々も、対象とされている方々の立場に立って日々の活動されていると思いますが、相手の立場に立つことは本当に難しいことで、よく観察し想像を働かせるだけでなく、何を考えているか、何を欲しているかについて五感を総動員して考え抜くことが必要です。しかし、それをしないと単なる自己満足に終わりそうな気がします。

申請書の記載についても同じことが言えます。各々の申

請プロジェクトについては決して専門家では無い選考委員に対して、独りよがりにならず、分かりやすく、プロジェクトの必要性を説明することは難しいことですが、それをしないと素晴らしい皆さまの活動が選考委員に理解されません。提出の前に選考委員の立場に立ってもう一度見直されることをお勧めします。

最後に、今回も選考を通してたいへん勉強させていただきました。機会を与えてくれた皆さまに感謝の意を表して感想とさせていただきます。

## 資料6

### 最終選考会寄付システムについて

第5回コミュニティケア活動資金助成プログラム 公開最終選考会

#### 最終選考会寄付システムについて

最終選考会の参加費は、最終選考に残った20団体とコムケアセンターに対する、今後の発展的な活動への期待を込めた寄付金となり、すべて各団体に還元されます。

寄付は参加費を支払った際に手渡される「ケアアップカード」にて行ないます。

#### ■ケアアップカードとは

ケアアップカードは、1枚当たり1,000円分の寄付に相当します。

- ケアアップカードによる寄付は、コムケア資金助成プログラムの投票とは別のものです。



最終選考のプレゼンテーションを聞きながら、当然本来のコムケア資金助成プログラムの投票も行ないませんが、それはある意味パブリックなもので、投票に参加した参加者の多数決による総意が結果として反映するものです。それに対してケアアップカードによる寄付は、個人的に「あの団体の活動は面白そうだ」とか、「興味のあるテーマで活動してるから支援したい」とか、個人のさまざまな思いや判断で、自由に自分の参加費相当額を寄付するプライベートなものです。

- ケアアップカードによる寄付は、お金だけではありません。

ケアアップカードには自由に書くことができる記入欄があります。ここは1,000円の寄付だけでなく、人的、物的な寄付の申し出など書き込むことができます。それは例えばイベントなどへの参加協力であったり、活動に必要なモノの提供、あるいは活動場所の提供もあるかもしれません。

もちろんそのような内容だけでなく、ケアアップカードに託す「思い」も是非お書きください。

実は、ここがケアアップカードの一番重要なところであると考えています。

コムケアの助成プログラムは人と人との結びつきをつくっていくことが最も重要なテーマです。ケアアップカードのコメント欄には是非お名前と連絡先をお書きください。そのことが将来どのような新しい展開を生むか、ケアアップくんは楽しみにしています。

#### ■ケアアップカードの使い方

ケアアップカードは参加費との引き換えで1枚お渡ししますが、おひとり複数団体に寄付したい、あるいはひとつの団体にもっとたくさん寄付したいといった場合、ケアアップカードを複数枚、購入する形で手に行なうことができます。また、ケアアップカードは今回最終選考に残った団体の関係者も購入することができます。コムケア資金助成プログラムの投票は、対象団体関係者は行なうことができませんが、ケアアップカードはそんなカタイことはありません。

#### ○ 寄付の方法

寄付はコムケア資金助成プログラムの投票後に行なわれる交流会にて行います。交流会会場に各団体ごとに「寄付箱」を設置しますので、寄付をしたい団体の寄付箱にケアアップカードを入れてください。それだけです。

もし交流会に参加できない方は、退席時に「寄付先」を記入の上、出口の寄付箱に入れてください。

## 資料7

### 資金助成プログラム選募集チラシ

# Community Care



2005年度 コミュニティケア活動資金助成プログラム

応募期間：2005年6月20日～8月15日

支援：住友生命社会福祉事業団、東レ株式会社

大きな福祉\*の視点から  
コミュニティケアの世界に  
新しい風を吹き込む  
新しいプロジェクト起こしを支援します。

今年の重点テーマは

「暮らしのなかの介護と医療」

「暮らしのなかのつながりづくり」



相互支援の輪づくり活動



- このプログラムは「大きな福祉」（下注参照）を目指して、コミュニティケアの分野で活動している市民活動団体の、新しいプロジェクト起こしを支援することを目的としています。
- ここでいう「コミュニティケア」は、将来的な問題も含めて、すべての人が安心して快適に暮らせる社会を目指した、人間同士の温かな相互支援関係づくりを意味しています。そうした主旨から、できるだけ多様な活動を支援し、つなげていきたいと考えています。
- このプログラムは、単なる資金助成だけではなく、応募された市民団体の活動に関して、可能な範囲で相談に応じさせていただきますが、同時に応募された市民団体にも、自らの強みを活かして、他の団体の支援に参加していただきたいと考えています。つまり、支援する側と支援される側に分かれるのではなく、お互いに支援し合える関係を育てていくことを目指した「共創型相互支援プログラム」です。
- したがって、参加（応募）したみなさんにも、ぜひそれぞれの強みを活かして、できる範囲で「支援する側」でも活動してもらいたいと思っています。また、そうした主旨から、応募された申請書はすべて公開されますので、あらかじめそのことをご了解の上、ご参加くださいますようお願いいたします。
- 参加してくださったみなさまと一緒に、お互いに支えあいながら、だれでもが安心して快適に暮らせる社会を育てていきたいと思っています。この資金助成プログラムは、そうした活動（コムケア活動と呼んでいます）の、いわば入り口のプログラムです。主旨に共感してくださる方々の応募をお待ちしています。

#### \*大きな福祉

福祉というと、介護や高齢者問題など、特別の問題をイメージしがちですが、私たちの生活や社会はさまざまなものが複雑に絡みあっています。ですから、個々の問題ごとに解決していくと同時に、それらをつなげていくことが大切です。

社会にあるさまざまな問題を、みんなが自分の問題として共有化し（つまり当事者になって）、一緒に知恵と汗を出しあいながら、みんなにとっての新しい価値（積極的な解決策）を創出していくこと。これが、私たちが考える「大きな福祉」です。

#### コミュニティケア活動支援センター

東京都文京区本郷3丁目37-8 本郷春木町ビル9階 (〒113-0033) 電話：03-5689-0957 FAX：03-5689-0958

Email [comcare@nifty.com](mailto:comcare@nifty.com) URL <http://homepage2.nifty.com/comcare/>

(コムケアセンターは、住友生命社会福祉事業団および東レ株式会社から支援を受けて、この活動を推進しています。)

コミュニティケア活動資金助成プログラムの特長  
参加してくださった団体の共創関係を育てていきます。

- 支援される側と支援する側とに分かれる一方的なプログラムではありません。
- 資金助成だけでなく、活動そのものに関する相談にも応じていきます。
- 応募した団体が相互に交流できるような横のつながりをつくっていきます。
- 応募団体の活動情報や申請書はホームページなどで公開されます。
- 資金助成対象先の最終選考には応募した団体も参加できます。

\*「共創」とは、参加した人たちが一緒に汗と知恵を出し合って、新しい価値を創出していくことを意味します。



## コミュニティケア活動支援プログラム募集概要

### ■ 募集要項

#### 1. 支援対象

##### (1) 対象となる団体

- ・ 団体の規模や法人格の有無は問いません。
- ・ 但し、次の要件に合った団体を対象とします。
- ① 本プログラムの理念（相互支援の輪づくり）に共感し、他の団体に対して、連携もしくは支援していこうという姿勢があること。
- ② 日本国内に活動拠点があり、活動場所が国内であること。
- ③ 政治団体、宗教団体、営利団体などは除く。

##### (2) 対象となる活動

「大きな福祉」（だれでもが安心して快適に暮らせる社会づくり）をめざして、全国各地でコミュニティケアに取り組んでいるNPOや市民活動団体の、新しいプロジェクト起ちを支援することを目的として、資金助成を行います。あわせて、そうした活動に対する資金面以外での支援もしていきます。

\*「新しいプロジェクト起ち」が対象ですので、日常的な活動や既に進めている事業は対象になりません。しかし、貴会の活動に新しい広がりをもたらすプロジェクトであれば、対象になります。詳しくは事務局にご相談下さい。

##### (3) 今年度の重点テーマ

今年度は、特に「暮らしのなかの介護と医療」と「暮らしのなかのつながりづくり」を重点テーマとして設定します。

\*重点テーマは、対象を狭めるためのものではなく、そうした要素を加味することで、プロジェクトの広がりを高めてほしいという思いをこめて設定しました。それぞれのプロジェクトの計画にあたり、いずれかの要素を加味してもらえればと思います。

#### 2. 資金助成内容（資金助成総額500万円）

- ・ 資金助成額は一律30万円（10団体）です。
- ・ 最終選考に残り、公開選考会で資金助成先とならなかった10団体には活動支援補助費として10万円（10団体）を助成します。
- ・ 他にイベント支援（10団体）を別途募集します。

#### 3. 応募条件

次の4つの条件を予めご了解の上、ご応募ください。

- ① 相互支援活動の輪づくりに参加していただきます。
- ② 応募された申請書が公開されます。
- ③ 最終選考に残った場合、東京で行なわれる選考会で応募プロジェクトについての発表を行なっていただきます。
- ④ 資金助成が行なわれた場合、当該プロジェクトの活動状況などをコムケアセンターのホームページに掲載していただきます。

#### 4. 資金助成対象の選考基準

資金助成の対象プロジェクトは次の基準を参考にして評価します。

- ① 社会性：本プログラムで定義する「大きな福祉」の理念に沿っていること
- ② 先進性：これまでなかったような新しい要素が含まれていること
- ③ 発展性：一過性のものでなく、継続的であり発展が期待されること
- ④ 汗のかき具合：お金で解決しようとしていないこと
- ⑤ 支援の必要性：支援することが実現の不可欠な要素であること
- ⑥ 今年度の重点テーマからの評価：テーマの要素が含まれていること

#### 5. 資金助成の選考方法

コミュニティケア活動実践者を中心とした選考委員の評価を踏まえて、候補を20団体に絞り込んだ上で、公開の最終選考会（10月1日を予定）で決定します。最終選考会では、絞り込まれた候補プロジェクトにそれぞれ発表してもらい、それに対する投票により決定します。投票には、希望する応募団体は参加できます。選考方法や選考過程はホームページで公開していきます。昨年度の経緯がホームページに掲載されていますので、ご参照ください。

#### 6. 資金助成の実施と報告書の提出

支援決定後、すぐに資金助成は実施されます（10月上旬の予定）。支援された資金の活用については、予算計画を提出していただき、当事務局と内容の確認をした上で（見直しをお願いすることもあります）、原則として支援を受けた団体の自己責任による自主管理とします。来年4月末までに、成果に関する報告書を出していただきますが、その際、資金の使途についても効果評価をしていただきます。

#### 7. 相互支援の場づくり

資金助成の対象となつたか否かを問わず、応募団体は、次のような相互支援の輪づくりに活動に参加できます。

- コミュニティケアに関する情報・意見交換を内容とするメーリングリスト
- コムケアサロン（東京：コミュニティケアに関する学びあいの場）
- ホームページの活用（コムケアのホームページに自分たちの真を持てる）
- 交流会（各地での交流会を実施）
- イベント支援資金助成プログラムへの応募（応募団体を中心に公募します）
- 自分たちの得意なノウハウや情報などでの参加団体への支援活動

### ■ 申請手続き

#### 1. 申請書類

ご提出いただく書類は以下の通りです。

- ① 申請団体紹介書（様式1）
- ② 申請プロジェクト計画書（様式2）

#### 2. 応募要項・申請用紙の入手方法

応募要項や申請書類様式は以下の方法で入手できます。

- ① インターネットによる入手  
コミュニティケア活動支援センターのホームページからダウンロードして下さい。
- ② 郵送による入手  
インターネットでのダウンロードができない場合は、宛先を記入した返送用封筒（定型封筒）に切手90円をはり、コムケアセンターまでお送りください。

#### 3. 申請方法

申請書類を事務局宛に郵送もしくは宅配便で提出してください。事故などで万一届かないことも想定されますので、発送後、1週間以内に事務局からの申請受理の連絡が行かない場合は事務局に確認して下さい。

#### 4. 応募期間

2005年6月20日～8月15日（当日必着）

#### 5. 照会先

本プログラムの内容や申請方法についての照会、申請に当たっての相談などがあれば、気楽に事務局までご連絡ください。プロジェクト内容に関する相談にも応じます。

詳しくはホームページをご覧ください。  
<http://homepage2.nifty.com/comcare/>

### ■ 事務局（申請書送付先）

#### コミュニティケア活動支援センター

住 所：東京都文京区本郷3丁目37-8 本郷春木町ビル9階  
〒113-0033  
電 話：03-5689-0957 ファクス：03-5689-0958  
メー ル：comcare@nifty.com  
U R L：<http://homepage2.nifty.com/comcare/>

\*コムケアセンターは、住友生命社会福祉事業団および東レ株式会社から支援を受けて、この活動を推進しています。

# 資料8

## 資金助成プログラム申請書様式

**様式1 (申請団体概要書)** 受理日 / 受付NO.

**第5回コミュニティケア活動資金助成プログラム申請書** **公開**  
(その1: 申請団体の概要)

ホームページでの公開を前提にお書きください。 2005年 月 日

ふりがな 団体名	設立年月日 西暦 年 月 日		
ふりがな 代表者	印	ふりがな 連絡担当者	
所在地	(〒 - )		
	TEL	FAX	
	E-mail		
	URL		
郵便物送付先 (宛先も記入)	(〒 - )		
他の団体に提供 できるノウハウなど	コミュニティケア関係の相互支援のネットワークを育てていくために、他の団体に対して提供できる情報やノウハウなどを具体的に箇条書きでご記入ください。 (1) (2) (3) (4) (5)		
団体紹介	100字程度で簡潔にお書きください。		
メンバーの概要	どのようなメンバーで構成されていますか (メンバー数も)。		
団体の主な活動 内容・活動実績	箇条書きでお書きください。		
主な活動地域			

※ パンフレットなど事業内容がわかる資料がありましたら提出して下さい。(但し、この申請書内で「別紙参照」などの表現は使わないで下さい)  
※ この申請書は外部の審議選考委員 (これまでの資金助成団体の関係者を含む) が見ることになります。また、ホームページで公開される可能性があります。住所、電話番号、FAX番号、メールアドレス、URLで非公開の項目があれば、その旨、明記してください。

**様式2 (プロジェクト計画書)** 団体名: \_\_\_\_\_

**第5回コミュニティケア活動資金助成プログラム申請書** **公開**  
(その2: 申請プロジェクト計画書)

ホームページでの公開を前提にお書きください。

プロジェクト (事業) 名 (事業内容がわかるように簡潔に表現してください)
目的 (このプロジェクトに取り組みたい目的をお書きください)
達成目標 (このプロジェクトで実現したいことになりたい姿) を、具体的にお書きください)
プロジェクトの概要 (目的達成のためにどのような活動をするのかを活動計画も含めて具体的にお書きください)
推進体制 (どんなメンバーで、どのような体制で取り組むのですか)

資金支出計画 (今回の助成金をどのように活用していくかを、項目別にお書きください)		
費目	金額 (千円単位)	内容 (できるだけ具体的に)
合計		
資金収入の予定 (本プロジェクト推進のために、本助成金のほかに自己資金や他からの収入などがある場合は、それらの概要をお書きください)		

※ この申請書は外部の審議選考委員 (これまでの資金助成団体の関係者を含む) が見ることになります。また、ホームページで公開される可能性があります。その前後にお書きください。

## メッセージ

# 新たな支え合いの輪づくりに向けて コムケアの仲間になりませんか

日本は本当に豊かになったのでしょうか。  
私たちは経済的な豊かさを追求するあまり  
何か大切なものをおろそかにしてしまったのではないのでしょうか。

たとえば

お互いに気遣い合うところ。

人と人の気持ちのつながり。

物や自然と心との通わせあい。

そして

誰もが安心して気持ちよく生活できる社会。

コムケア活動は

そうしたつながりや社会をみんなで回復して行こうという活動です。  
みなさんもぜひコムケアの仲間になってください。

資金助成プログラム以外にも次のようなプログラムがあります。  
みなさんのご参加をお待ちしています。

コムケアメーリングリスト

コムケアサロン

テーマ研究会

コムケアフォーラム

コムケア活動や各地でのコムケア仲間の集まりの支援

コムケア活動を支援してくれるボランティア(コムケア応援団)も募集しています。

コムケア仲間やコムケア応援団への参加をご希望の方は  
コムケアセンターまでご連絡下さい。



ケアップくん

コムケア活動は住友生命社会福祉事業団および東レ株式会社の支援によって展開されています。



コムケア応援団

麻野信子、阿部達明、石井邦知、大川新人、檜木八重子、加藤木桜子  
鎌田芳郎、菅野弘達、北村英男、小山美代、近藤将仁、斉藤ちず  
坂谷信雄、佐々木 敏之、佐藤和美、佐藤隆、佐藤祐子、島村八重子  
下山浩一、新谷大輔、須田正子、瀬谷重信、橋本克己、星野一人  
竹之内由美子、田辺大、西川義夫、松清智洋、松浦光恵、宮川元則  
宮田喜代志、八木雅昭、山川 清一、横尾徹也、渡邊早苗

資金助成プログラム選考委員

片岡勝、北矢行男、木原孝久、町田洋次

コムケアセンタースタッフ

斉藤正俊、佐藤修、橋本典之、宮部浩司

デザイン

宮部浩司

企画・編集

佐藤修

発行（照会先）

2006年5月15日

**コミュニティケア活動支援センター**

東京都文京区本郷3-37-8本郷春木町ビル9階

〒113-0033

電話：03-5689-0957

Eメール：comcare@nifty.com

ホームページ：http://homepage2.nifty.com/comcare/

この報告書は住友生命社会福祉事業団および東レ株式会社の支援によって作成されました。

